

お父さんが、「二遍物を云つたら、直ぐ素直にそれを聞かなければ……」と、強く叱りつけなされた。僕はお父さんに注意を受けたので、氣持が悪くてその楽しい食事、淋しい食事となつて了つた。

『嗚呼！あの時、僕は何故早く食事に取りつかなくつたか。』と、後悔の心が涌き起つて來た。そして胸が支へて御飯も味なく感じられて食べられなくなつて來た。そして、『此からは人が何か云はれた時には、素直に聞かう。』と、決心したさうする事が、やがてお互の幸福を増す事であり、又、お互の損失を少くする事である。嗚呼！あの時は僕が悪かつたのだ。その後悔の念は針で刺す如くに僕を苦しめる。

もう勉強も何も手につかない。嗚呼！僕は何と馬鹿な人間であらうか。此の間も僕が勉強最中に眠つてゐるのは、女中さんが親切にも僕を起して下さつた。だが僕は癪に障つたと見えてむか／＼として女中さんを罵つた。僕は時々睡くなると、直ぐに人を怒る短所がある。それは僕の大なる缺點なのだ。此の缺點を無くする事が、僕に取つては最も大切な事であると、泌々思つた。今宵の此の失敗によつて、將來再び此の様な過失を繰返さない様にと、心に誓つた。

## 月

一年 染川 人仁

僕は或夜月を見た。圓に近い大きな月。雲を拂ひながら大地を見下す、我等に一種の神秘力を思はせる月。僕は飽かず見入つた。僕は生れて以來數知れず月を眺めた。勉強に飽きて窓越しに見た月。旅て父母の事を思ひつゝ、見た月、父に叱られて暗い心で見た月、歌言葉を考へながら見た月。其等が一々僕の心に強く印象付けられた事ばかりであつた。今鮮か半月を眺め乍ら昔の月を追想すると、何かしら僕の胸に深いものを與けて呉れる様に思はれる。幼い頃は月を見ると、よく月に關する傳説を考へて、色々の空想に耽つたものであつた。

人々は澄み切つた秋空に皎々と、洵え渡つた月を眺める事があらう。そしてさうした時、清い空氣を吸ひ、鮮かな月を眺めてゐると、何か鼓膜に響く音を感じるであらう。秋を象徴する、情趣深い蟲の聲である。

かや引きてこほろぎ飛べり秋の夜。

はたおりの聲も涼しき宵の風呂。

月光の大地に漲る頃は、『産めよ、殖せよ、地に充てよ』しと言つた神の言葉を、忠實に遵奉してゐる蟲の聲で溢れてゐる。前栽の植を込み、家の軒、物の隅等て涼しい美音を發

## 秋

一年 福永慶太郎

澄み渡つた大空には、鳶が大きな圓を描いて悠々と舞つて居る。太陰を見ると、やつと咲いた野菊に風が吹いて、ゆらりゆらりと動いてゐる。それを目當に飛んで來た唯一匹の赤蜻蛉は、さも悲しさうに止らうとしてゐるが、さうしても止れないので、尙悲しさうに向ふの方へ過ぎ去つた。風は近くの家の側に聳え立つてゐる、高い天を衝く様な銀杏に當つてさあ／＼と軽い音を立て、ゐる。其の下では、咲き終つた風仙花が、唯一本の白い花を名残惜しさうに咲かいて、種は今にも弾けさうに頭をうなだれてゐる。向ふにある森には、お墓がしょんぼりと、木の間から頭を出してゐる。今迄遊んでゐた鳥が、淋しそうに啼へ、かあ／＼／＼と鳴きながら歸つて行く。西の空が茜色に染つた。小さな小供が、大きな聲で夕焼け小焼けと歌つて居る。家の軒からは、蝙蝠が數へ切れぬ程出てゐる。

蝙蝠を見ると、直ぐあの面白いお伽話が思ひ出される。數人の男の子が、蝙蝠に石を投げて遊んでゐる。

次第に暗くなつて、見る間に夜の帳が下されて了つた。床の下や、叢でコロ／＼／＼と鳴く蟲の聲は、一入佗しさを添へる様に感ぜられる。

して鳴く秋の蟲は、可憐な物である。涼風を受けて靜かに揺れる大木は、月光の爲に鮮かな影を作つてゐる。大地の總べては今靜かに眠つてゐる。蟲の聲を聞き月を見ながら、僕も寢に就いた。

嗚呼……自然の偉大さよ……

## 夕

## 立

一年 三木 幸夫

風のない蒸し暑い午後の事である。蟬の喧しい聲の外は、物音一つ聞えない。眞黒い雪が盛に動いてゐるが、蜘蛛はせつせと枝から枝へと糸を張つてゐる。突然吹き來る一陣の風と共に、大粒の雨がバタ／＼木の葉を叩く。暫すると、さあつと瀧のやうに降り出して來た。さしも喧しかつた蟬の聲も今は全く止んで了つて、部屋は夕方の様になり、字引の字も殆ど讀めなくなつて了つた。ゴロ／＼、ゴロ／＼、段々近くに雷鳴が迫つて來るにつれて、時々面できら／＼と稻妻がきらめく。ゴロ／＼、ゴロ／＼と、益々雷鳴が轟く。間もなく雷鳴も遠ざかり、夕立も止んで、涼しい風がすつと窓から入つて來た。早や太陽は光線を投げ始め、草木は生れ變つた様になり、蜘蛛は破れた、雨に光つた巢を繕ひ始め、何もかも朝のやうな清々しい氣持を漲らせて居た。

大空には悲しさうな月が出て来た。  
秋の夕暮程忙しくあはれ深いものはない。

## 湖畔に休みて

一年 中村 正孝

バット眼界が開けて湖に出る。  
眼の前に島が見える。多景島だらう。  
小波の盡きる所に西江州の山々が連つてゐる。その左遠く  
に大溝が突出てばるので琵琶湖に見えなくなる。首を右に廻  
らすと、遙か彼方に伊吹の雲峰は様々の史跡を包んで見え立  
つてゐる。

砂の上に腰を下して休む。

直ぐ眼の前に促される如くに小波はさら／＼と押し寄せて  
来る。前に横はる入江の中に一つの屋形船がある。人が住ん  
でゐるらしい。砂丘の上に、古びた雨晒しの風呂が、側の枯  
松の薪と一緒にひっそりとすましてゐる。

『ダッダッ。』とモーターの音がする。『砂取りの機械だ  
よ。』とSさんは言つた。静かだつた四邊は、エンヂンの音で  
騒しくなつて来た。

そんな中でSさんと繪を書く。

廣い砂丘、入江の畔、濃緑の松、奇妙な雲の動き、凡て一

供もあれば、バラツルの影を水に寫して、笑ひさゞめきつ、  
逍遙する母娘連もある。ボートを漕ぐ群も楽しげであれば、  
水煙を立て、飛び込む若人も愉快である。

僕等二人は棧橋へ行つた。友達は早や四五人も来て居て、  
僕等の来るのを待つて居た。棧橋の先にある一番高い材の上  
に立つた僕は、一思ひに飛び込んだ。平田君も、田附君も、  
弟も皆續いて飛び込んだ。そして浮いては沈み、沈んでは浮  
きして泳ぎ廻つた。かうして或は、飛び近みに或は競泳に時  
を忘れて楽しんだ。

泳を引上げた僕等は、水泳着を竿に掛けて運動服を着た  
ボールとバットを舂つて外へ出た。僕の後から、弟はミット  
をはめてやつて来た。家の前の廣場で二人がキャッチボール  
をして居ると、俄かに四邊が暗黒になつて来た。木の間越し  
に見える波は荒獅子のやうに唸を立て、狂つたやうに岸に押  
し寄せて来る。道路からは目も明けられない程の砂煙が吹き  
上げられる。僕はバットを握つたまゝ、弟はミットをはめた  
まゝ、一目散に濱へ走つた。つい先程迄は如何にも平和であ  
つた濱がすへかり變つて、物凄い狂瀾怒濤の巷となつて居る  
遙か沖に、發動機船に引かれた四五艘の帆掛舟、一荒れ狂ふ  
波の間に間に、まるで木の葉の波にもまれる様に悩まされて  
居る。何時の間にか二人集り、三人集りして来た村人達は、  
此の哀な舟を唯『あれよ！あれよ！』とばかり眺めて居る。

つの繪となる。  
不圖氣付くとモーターが止んでゐる。又四邊は静かになつ  
た。

入江の中に魚が浮いて来て、又沈んだ。  
空には大分灰色の雲が動き始めた。

『ボ、ボーツ。』汽船だ。港灣へは入つて行くのだらう。最  
早煙も出ない。あのぼんやりとした汽笛の音に、バンクーバ  
ーの父母を思ひ出す。そして歸つて来た時の難船の夜を。又  
無事に上陸した横濱の朝を。

『ボ、ボーツ。』船は砂丘に隠れて見えない。

美しい景色の中に包まれて、二つの長い影は、真赤な花咲  
く丘の後にだん／＼と伸びて行きます。湖畔は静かです。

『もう歸らう。』

Sさんの聲に、僕も思はず欠伸をした。

鳥が二羽、森の方へ飛んで行つた。

## 夏休中のこと

一年 伊藤 稔

晝食を終り、水泳着に着換へた僕と弟とは、裏口を飛び出  
して濱へと走つた。今日は焼けつく程の暑さでもないが、濱  
は何時もの様に賑やかである。磯の。小石をいちづつて居る子

側に居た小父さんが、『今に雨になるよ。』とおつしやつたの  
で僕等二人は一目散に走つて歸つた。

すつかり雨戸が閉められた家の中は眞黒だ。果して雨が降  
り出して来た。風は益々激しくなる。比較的風當りの少い側  
の雨戸を少し許り開けて、硝子越しに外を眺めると、樋から  
は雨水が溢れて漏つてゐる。篠衝く様な雨の玉が、ばちばち  
と硝子にぶつつけて来る。道路は一面水に満あれて、まるで  
川のやうになつて流れて居る。ボブラの技が屋根をはらつて  
ゐる。松の小枝が折れて飛んで行く。誠に物凄い、男性的な  
勇壯な情景である。

かうした状態も暫て、次第に四邊が明るくなるに連れて、  
雨風も止んだ。先刻の舟はさうなつて居るだらうと、濱へ行  
つて見ると、無事に沖を南の方へ走つて居た。未だ波は高く  
岸を洗つて居る。

畠へ来て見ると、絲瓜の木が風に吹き飛されて、無慘な姿  
になつて居る。南瓜の葉も蔓も位置を換へて、今迄葉に隠れ  
て見えなかつた實が、三つも姿を表はして顔を日に晒してゐ  
る。茄子が殆ど横倒しにされてゐるのが、如何にも哀であつ  
た。





詩

夏の眞晝

五年 小林 研一

夏の太陽が怒つてゐる。  
入道雪がだん／＼むくれ上つて その力を誇  
つてゐる。  
青空高く燕が浮いて  
蟬の聲がしきりに聞えてゐる。

廣い／＼曠夜の果て 朝の風のはげしさ  
警備の哨兵の尊いかげは動かす

日輪が軋り出す  
國境の山脈はすつとすつと續く  
伸びゆく滿蒙の天地に  
幸福な世界の夜は明ける  
朝風の中に、私は  
明朗な日本の明日を思ふ  
輝く朝日を浴びて  
警備の兵士のかけは動かす  
尊い姿  
異境を守る。

祝ひ日

五年 湯木 信良

日の木の 神の御國の  
大空にひるがへる 日の御旗  
かしこさは千代にやどれり  
尊ききはみ

僕

五年 松林 時雄

世に勝つ意地——僕は男、男。  
何の、苦難が怖からう。何の缺乏が辛からう  
ある。困苦は神の試練である。窮乏は成功の暗示で  
ある。  
國に捨てる生命——男、男。  
子供心に漠然たる帝國軍人の夢。それから  
十九年間育つて。今に變らぬ僕。

祝ひ日の歌を歌へや  
大君をこまほさまつり  
今日のよき日を  
ひるがへる 日の御旗

天地の神もや聞かん  
國民の心の聲  
空高くのどげき日和  
ひるがへる 日の御旗

曠野の朝

五年 西島 雅彌

東雲がたゞよふ

こゝは松原、琵琶湖は光る。  
ホシホシ蒸氣が踊つて行つたあこ  
水に戯れる少年少女の聲は次第に高くなつた  
多景島が風に送られて だん／＼とこちらへ  
近寄つてくるやうだ。

母校

五年 國島 惠裕

櫻咲く春を待たず  
去りゆかむ この學舎はも  
別れんとする心になし  
われらの學舎

黄昏の神の工たくみが  
大空の陽の恵みか  
一日の疲れを慰めてわれらを包む。

城山の時鐘

五年 赤井 鐵也

城山にのこる古典  
鐘守の老夫婦は  
風霜幾十年を籠り居て  
人のため 明け暮れの時を告ぐる。

白雲黒雲

五年 川森 義夫

大空に築く 堂々たる殿堂  
平和と神秘に鎖されて  
白雲動かす 何ぞそれ泰然たる  
颱風いづくにか  
恐れざるその雄姿よ  
空を渡る 變化何もの  
閃光一線 天地に咆哮す  
黒雲躍動して 頭上は暗し  
覺性が 黒軍が  
豪雨矢の如く 地軸を貫く。

鐘は響き 鐘は鳴る。

夕の空

五年 高橋 隆男

夕の空に光ありて  
家も野も人も草も  
莊嚴に輝くことし

人は働き 人は眠る  
静かなる街の巷に  
時の間の時を違へず  
鐘は鳴り 鐘は響く。  
人よ醒めよ 人よ休めよ  
力強く 心やさしく

彦中賦

四年 岩崎 清

連山の影をひたして  
澄むや琵琶湖の濱近く  
誇り立つ 城山松の

尙武の風に洗はれて  
建てり 吾等の巖堂

五十年の歴史を預ひて  
いそしめる七百の健兒  
方は満ちぬ、和は湛へたり  
金龜の四季に護られて  
意氣高し 吾等の學園。

### 春宵

四年 北村 忠夫

春の氣の葡ひよりて 風は和みぬ  
霧雨のかゝる夜なり  
しめやかに 常夜燈動かす  
さもしび霞みてあり。  
春の息吹甘やかに 水温みの  
灯影水に流れて  
こまやかに夢を綴れり  
柳影 常夜燈にさゞめく。  
何もなく 森は妖しき  
霧雨の春に濡れ來て

うるむ灯の常夜燈  
春は孤獨の吾をつゝめり。

### 秋の靜寂境

四年 圓城政太郎

秋靜か  
鳥鳴きて 木は高し  
柿の實の二つ三つあり。

山深く  
松は榮えて 落葉がくれに  
粟二つ 三つあり。

風がるし  
ふと見たる病葉に  
雨蛙の動かす 何を思ふや。

### 秋

三年 中川 義朗

御手洗の底に  
冷たく沈んでゐる落葉  
寂さして秋のひささき

蟲の音の哀愁はまさり  
夜をつゝむ 黒いヴェール  
窓をかき 夜のひささき

### 秋の夜

三年 滿島 俊次

人が月を見 蟲なき、  
そして歸つて行つたあと  
燈火を暮ふて 黒い蝶が  
私の書齋にはためく

星は渾なく 大空に擴がつて  
白い月の光に

蟲の音が 吸ひこまれてゆく  
夜更けの庭に出て  
私は——秋を思ふ  
秋の夜更けの黒い蝶を思ふ。

### みのりの秋

二年 宮下 勉

口を開けて 葉蔭からのぞいてゐる無花果

枝にくつついた黄ろい柿 赤い柿  
山には豊 野には稻の穂  
此處にも彼處にも  
朗らかな農夫の會話  
秋は日和のうれしさうな會話

### 詩 一一題

二年 柏島 敏男

### 湖畔

或月夜の湖の面、  
それはつやのある塗たての壁でした。  
そして——  
湖畔の村々の  
黄金色の田と葉ぶきの屋根は  
靜かでひっそりしてゐました。  
なだらかな圓みの山と、ヨバルトの空が  
村々のパツクでした。

### 一つの芽

何時の間に土を抜けて  
ひっそりて萌えて居たのだらう、  
たゞ一つの小さい芽

友の群を離れて淋しいく  
孤獨に——  
すゝり泣いてゐる様な  
たゞ一つの小さい紫の芽  
夏の夕暮の庭でした。

### 雪

二年 森 東三

冬天から降る雪  
眞白な雪  
靜かに音もなく  
純白に世界をつゝむ  
見渡す限り白衣の清淨  
その冷に肌にも まつ白な肌にも  
なんとなしになつかしさがわく。

### 大日本の歌

一年 小林 清基

一、亞細亞の光  
日出づる國日本  
神孫の上に奉體する

東亞の守り  
我が日本。

二、亞細亞のまもり  
日出づる國日本  
一度國に事あらば  
舉國一致ぞ  
我が日本。

三、亞細亞の盟主  
日出づる國日本  
世界無比の國體國是  
世界の柱  
我が日本。

### 僕は中學一年生

一年 岡本 良平

制服制帽嬉しいな  
靴も光つてる嬉しいな  
僕は中學一年生  
一步もたゆまずしつかりと  
よく勉強してえらくなる  
僕は中學一年生。

身體はいつも健康に  
いつもこゝろ楽しいな  
僕は中學一年生。

### 風の夕方

一年 荒木 信一

黒雲出た夕方  
子供が二人、さみしさに歌つて通る。  
風を切る自動車、  
砂煙が夕べの風にまじつてゐる。  
僕は何時迄も、風を見つめてゐた。  
何時か目が寒くなつた。

お宮の杜の隣の家  
納屋の白壁  
その屋根下に鳩が二羽  
ちつとしてゐた。  
柿の木の枝に千大根が  
寒々々  
夕の風に吹かれてゐた。

／＼と散る  
線香のかほりゆかしき我が部屋よ火鉢により  
て本を讀むかな  
代敷の括弧を外す問題の解けし瞬間師を思ひ  
出す  
ほか／＼と青き光を放ちつゝ木の間にぐれに  
壁飛びかふ  
さら／＼と小川の流れ静けくて草葉に宿る蟲  
の音清し

五年 湯本 信良

いへづこも籠にもりたる青栗のいがに光れる  
清き朝露  
湯上りのタオル片手に庭みれば雨にかすめる  
コスモスの花  
仲秋の月の光にてらされて寒々々見ゆ家々の  
屋根  
あらたまの年を迎へてこゝろがむいや榮えゆ  
く君が八千代を

五年 藤邊 行静

亡き靈を迎へて歸る子供等の淋しき面に涙湧  
きくも  
ありし日の君が言葉と思ひ出し心締めつゝ香  
なば焚きぬ



### 短歌

五年 柴田 良治

荒磯の斷崖の下白波のくだくる岩は苦むして  
居る  
泡たてる湖の面にうく鴨の風のまに／＼に遠  
くたり行く  
實彈のその鈍い銀色を珍しみ手はふるへつゝ  
新銃にこめる  
陽の照れる硝子戸の内に銀蠅が力なく居る秋  
もたけたり  
書にあきてロビイに出れば青き空行く雲は高  
くあるかな  
鳥らは空をいそげり赤き日が地平のはてを大  
きく沈む  
木枯に獨りうたへば枯枝をつめたくさする橙  
色の太陽  
島の木の黒きがさびしエングンの響を腹でき  
くつゝなれば  
日暮るれば生駒は見えず草上げき大和平地を  
おほふ雨雲

ほか／＼と秋の日受けし縁先きでのびし手指  
の爪切りにけり  
長閑なる秋空晴れし青空に廣告氣球一つ見え  
たり  
夜深く歩暗に立ちて眺むれば木々の影さへ敵  
兵に見ゆ

五年 越 武和

赤鬼の其の名も高き學び舎に今年五十の春は  
來迎ふ  
見返れば知多の山影遠くして海の彼方を水鳥  
の立つ  
熱田驛の別れの際の我従弟三坊の顔未だ忘れ  
られず  
思ひ出は再び廻る懐しき知多の浦邊の友の身  
の上

四年 瀧川 崇文

三百年の夢か誇りか彦根城秋の荒風吹くにま  
かせて  
春の日に草摘み遊びし野の道に今は寂しく霜  
のかゝれる  
勝、勝、勝、我等は勝てり日やけせる顔にあ  
ふるる感激の涙

あるときはかたく握りし掌開き汗ばみし指紋  
珍らしみ見る

五年 松林 時雄

一株の菊花なれどしいや多くはびこれるこの  
美しき群落  
時雨降る中を走り來て妹は葱の一束を我が手  
に渡せり  
秋風の川淀に垂るる柳條の動くは鯉の戯るゝ  
なるか

五年 河邊 泉

古き本開けば出づる押花の一つ／＼に思ひ出  
の湧く  
休み日の心安けし縁に出て友への文を書き連  
ねたり  
坂道を登りつくせば日の陰り平原の草をよぎ  
るるなり  
戦友の呼び合ふ聲す湖畔に朝を我らは今迎へ  
たり  
木枯に吹き散されて一群の小鳥は空を流れ行  
くなり

五年 國島 惠裕

露影に寂しく咲ける栗の花人に知られずほろ

四年 岩崎 清

秋風の寒く吹きし我が庭の枯葉の下に蟋蟀  
鳴くも  
庭草に秋雨降りて蟋蟀の鳴く聲聞けば秋づき  
にけり  
戸を叩く或る秋の夜の風寒し迫れる冬を我に  
知らせて  
秋かれて風寒き野の夕煙長々として打つゞき  
たり  
畑にゆけばかぐるき土の軟く足にたはむる秋  
の一こき

四年 窓岡 秀道

大空をたゞ一息にのむがこゝろ深呼吸する初秋  
の朝  
だん／＼と日毎に小さくなりて行く今日か名  
残の朝顔の花  
夕暮の湖水の水面ざわめきて名知らぬ鳥の聲  
ぞ淋しき  
夕立はからり晴れて七色の虹ははるかな森  
にかゝれり  
遙く夏を惜しみて鳴くやつ／＼しきやけき  
秋の七草咲くに

三年 中川 義朗

しこく雨の降る夜は故郷の家のこゝろなご  
思ひぬるかな  
寝不足の朝の氣持を晴々さ鷓の鳴きて氣も澄  
みにけり  
何となく涙ぐましき秋の暮よりそふ窓に花の  
散りて来る

三年 和田 哲

午過ぎの夏の光のさす中を元氣に遊ぶ一二年  
生  
深呼吸しつゝ仰げば大銀杏の青葉のおくに金  
色の實見ゆ

三年 杉原 眞一

廣庭の一つ残れる菊の花風に吹かれて咲いて  
ゐるかも  
柔らかな日射を受けし雨ごゆに遊べる雀の樂  
しげに見ゆ

三年 谷口 勉

おほらかにさくらの花は咲きにけり静かに開  
ゆ中耕の音  
ひさかにの天の御神の御血統の絶ゆる事なく

の畑に

二年 大照 完

濱の水に夕日は赤くうつりを別れし人ら思  
ひ浮ぶも  
縁に田ではつと思つてよく見れば松の小枝に  
鳶の子動く

二年 葛 滋郎

湖のはるかかを白き雲湧けり帆かけ船行く二つ  
又三つ  
城山の鐘は静かに聞ゆなる梢ゆすりて風吹け  
る朝を

一年 藤居 曉

勉強に疲れはててふき見入る火事だかと思ふ  
雲の夕やけ  
水泳してゐる子等は夕立の中にあてなほも未  
だ浴びてゐる

一年 久保田久彌

劍道の面さりし友の頭からお風呂上りのこま  
く湯氣の立ち居り  
中學の一年生の柔道は氣合ばかりの元氣なる  
かな

今日に流るゝ

雨の日にそよぐ草木の様みつゝうれしと思ふ  
わがあげくれな  
この上の樂しきこゝはなかりけり親のみ足を  
揉める一とき  
もろこしは日に照らされて静かなり夏の朝け  
の裏畑に立つ

三年 高橋 希

にはか雨晴れて照る日の強けば軒の古木の  
陽炎ひ立つも  
菊作る父のそびらに小春日の陽のやはらかに  
照らひつゝあり  
夕近く彦根の港をゆるやかに荷をつみおへて  
大船の出る

二年 森 東三

柵の上に作りし菊の一本が今朝ひらきたり秋  
まだ早きに  
汐の香に引きつけられて水遊び今日も又行く  
暑き夏の日

二年 金網 猛

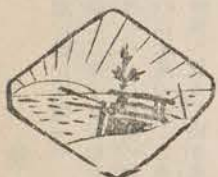
霜の庭にひらりし柿の葉の落つる廣葉の落ち  
る音のしづけさ

一年 染川 人任

書を見て我の生れし里の名の書きてありしが  
心うれしき  
緑なす青葉の影の下露にぬれて冷たき朝ほら  
けかな  
風も無く空に雲なき夏の日の琵琶の湖邊にひ  
まり立ちたり

一年 田村 欣三

オリピックのマイクの前にがんばれミアナウ  
ンサーも涙こぼるなり  
ダイビングバット飛び散る水しぶき松原松に  
風一つなし  
夕闇に時々光るいなびかり雲は見えねど風は  
涼しき  
ひぐらしの聲の暑さを城山の夕鐘ゴーンと打  
消しにけり



ぬかるみに掃き落されしならの葉の踏まれ  
て土さなりゆく

二年 寺村 道夫

朝露は松並木より晴れ行きてほの見え初めぬ  
故郷の山  
何時となく庭のヤブラも黄にそみてひらく  
と散る晩秋の風に

二年 尾本 一雄

燈火の光さかすこの土間の下駄に隠れて蟋  
蟀鳴けり  
一日のなりはひ終へて歸り來し家にはすでに  
灯のつきてゐる

二年 松田 又一

宿題の山さ積みたり今日一日母の呼ぶ聲耳に  
入らずも  
白雲の追ひつ追はれつ鬼ごっこするが如きを  
眺めて走る

二年 辻 誠夫

弟の魚を釣りたる顔見ればにこく笑ふいち  
らしきかな  
涼風のそよ吹くまゝに白粉の花ゆれやまづ裏

夕陽は照り輝く。放課後のグラウン  
ド。ア式蹴球に一心になつてゐる我等  
ドリブル／＼。シュート。蹴球は高  
く上つた。然り餘りにも高く上り過  
ぎた。さ。○○先生が横から走つて  
来てジャンプ。頭髮は亂れ散つて、  
その白く光つた頭天の中央の眞上へ  
球は轉落。反動の原理君知るや。球  
は高く飛び上りぬ。喊聲はどつど湧  
く。此の間五秒、否三秒。一在學中  
の思ひ出の一つである。(毛利)



俳句

五年 松宮 久延

秋空に黄金の氣球上りけり  
白壁や真赤な鷺の這ひわたる  
秋高き國の護りの銀翼機  
夕暮を千大根にしぐれして

五年 河部 杲

湖の暮残りたる白さ霞  
枯草の路長々秋晴る  
賣出しを見て歩きけり秋の雨

五年 村西源一郎

涼風に吹かれて行くや墓まゐり  
しかられて瓜切りに出るこたつかな  
花摘みに疲れし兒等の早寝かな  
ほん／＼ミ菫叩くや秋任舞  
寢口へ夕日さし込み時雨れつゝ

五年 漢 正印

あぶらざる顔に動かす蠅一つ  
病みて臥す眼には眩ゆき若葉かな  
朝のバス尾根をめぐれば夏の湖  
水打つて居れば木魚のきこえ来る  
すいちよな蚊張へ放ちて寝る夜かな  
稻の波いたち横切る野道かな

四年 村井 博一

秋深し庭の柿の葉のすてごころ  
汽車の音の今日はさみしき夜寒かな

四年 岩崎 清

穗芒のゆれて光りて暮れてゆく  
露のまゝ、ドライヤの枝を切りけり  
月影にユスモスの花眠りつゝ  
闇ながら籠の鈴蟲鳴けりけり

三年 谷口

ぼろを着て青田守れるかゞしか  
夕立や調子揃えて豆の小葉

三年 満島 俊次

蟬取りや無帽の子等も交り居り  
飛行機の爆音高しいわし雲

三年 杉原 眞一

朝霧に消えてゆきたり友の影  
窓越しの天平櫓高し  
手をうてば枝うつりする雀の子  
河原ただ聲なく月のすゝきかな

三年 井場 一郎

老杉の昔かたるや秋の暮  
夕空に星出でそめし風情かな

二年 杉田 喜貞

鳴く蟬に子供静かに近づけり  
病身の父も縁に在りあばれ雨

一年 中津 孚

ほん／＼と音のみの船夜の海  
宵早くうすき光の月上る  
蘆の芽に流れついたら水泡かな  
西瓜切る母を圍みて坐りけり

二年 小田 博

たこつばの濱にちらばる月夜かな  
雨あがり葦の葉かげの貸ホート

夏の夜を流れ星しきりなり

二年 河崎 敏男

すゞ風に吹かれて遠き田舎道  
紅鱒や川鱒やあそぶ宗谷川

二年 西川 知一

朝露やいなご飛び交ふ田舎道  
さゞなみや風にくたけてさぶ登

二年 尾本 一雄

黒土の乾く匂ひや麥芽立  
ストローザに雪かこちつゝ、汽車を待つ

一年 花澤 宏

爆音や空見るたびに父戀ふる  
城山や昔ながらの蟬の聲

一年 山中利一郎

朝顔の顔そろへたり夏の朝  
子供等の花火の音や夏の宵

一年 加藤 太郎

鉢水に金魚死にける曇さかな  
はすの花一本持つて墓参り

一年 菅原 直武

硝子戸にびつたりついでる大やもり  
朝顔の漸くにして芽を出しぬ

一年 則岡 眞澄

みち潮に賑らみて起きし夏藻かな  
夕風や海に月なく土用入

一年 柳本 鶴彦

星を仰ぎ星を語りつ涼みけり  
涼み臺にもちよりに遊ぶ花火かな

一年 樋口新一郎

養魚池に家も建ちたり夏木立  
電柱に工夫登れり雲の峯  
夏草にボールを捜す眞晝かな

一年 土屋 武雄

木の蔭に暑さ凌ぐや虫つかみ  
ガン／＼と花火のあがる二七市  
八月の朝風朝露山登る

本校の入學考査の口頭試問の時のことだつた。  
係りの先生は二人とも眼鏡をかけて居られた。ストローザがかつた燃えててゐて室内は暖かだつた、僕はその先生の前に直立してゐた。  
「君は將來何になる積りかね」  
「二人の先生は驚いた様に眼を圓くし、そして微笑んで僕の顔を見られた。」  
「ハイ。世界一の總理大臣になる積りです。」  
「僕は直下に答へた。」  
「ほう。」  
二人の先生は驚いた様に眼を圓くし、そして微笑んで僕の顔を見られた。その瞬間、僕は聊か得意になつて、思はず微笑んだ。今思ひ出す穴へでもは入りた位だ。(島本)



# 兵營宿泊記

五年 長谷川干勝

## 第一日 (九月九日)

憧憬の兵營宿泊の日は遂に來た。この日こそ將來日本の中堅人物たるべき中學生に取り最も意義深く最も記念すべき日である。例年は敦賀の聯隊であつたが今年は京都伏見の歩兵第九聯隊に宿泊する事になつた。武裝をして校庭に集合校長代理松田先生の訓辭を受け刻曉たる喇叭の音にあはせて歩武堂々校門を出た。恰も出征する兵士の營門を出るが如き感じがした。午前八時三十三分彦根驛發一路伏見に向ふ途中京都市にて奈良線に乘換して十時五十八分伏見着驛前に整列服裝を正し明治天皇の御陵に向つた。參道の兩側に松柏樹蒼蒼として生ひ繁り白砂清々しき參道に相映じ莊嚴として靜まりかへつてゐる。正午の焼けつくやうな日に照らされて、背囊を負ふ背中がびつしより汗ばんでくる。十分ばかりにして御陵前に到着した。中隊長の號令で「捧げ銃」の禮を行ひ、聖皇明治天皇の御冥福を祈り奉り合せて現時の難局打破の善轉を祈願した。尋いで昭憲皇太后の御陵に詣り、其處を去つて乃木神社の境内で中食を取つた。中餐を終へると神社に参拜し附近にある大將生ひ立の家、旅順役當時の住居など見學したが、大將の勤儉實素の有様を眼のあたりに見て感慨無量なるものがあつた。再び隊伍を

整へて目的の兵營に足を運んだ。時々演習に行くのかと思はれる兵士が教官殿を見て「歩調取れ、頭右、直れ。歩調止め。」と勇しい號令を掛け敬禮して過ぎて行く。行く事十分にして營門に着。いよいよ兵營に來たんだ短い間だが入營するのだ。と思ふも何んだか恐ろしいやうな嬉しい様な氣持がする。營門を潜ると先づ聯隊旗に對して「捧げ銃」の敬禮を行ふ。歩兵砲中隊第五中隊、第六中隊等に分宿することになり我等第三小隊の前中は第五中隊に宿泊する事になつた。上等兵殿の案内で二階の室に入つたが、その室たるや實に質素そのもので、天井などはなく白木の柱が縱横に組合されてゐるのが見えるが併し非常に丈夫だこの事。かういふ點にも軍隊的色彩が十分見られる。室の兩側に寢臺があり、その間に粗末な食卓と椅子がある。兩側の寢臺の所に棚があり背囊は此處に置くのだといふ。上等兵殿から食器をもちつたがアルミニウム製で椀、皿共に二つづつである。因みに軍隊では食器を始めとしてそれに附屬するものが皆アルミニウム製である。一道の説明を聞き終ると暫時休息した。窓から涼しい秋風がそよ／＼と吹き込んで來、蟬も今年の最後の聲を擡つて鳴いてゐる。この聯隊は今春迄滿洲で活躍して居られたさうである。喇叭が耳近くで鳴らされた。飯を取りに來いとの報知だ。上等兵の指圖で服裝を正して下へ下りると他の室から來られた兵が既に整列して居られる。「我も遅れじ」その後には並ぶ。「前へ進め」の號令で炊事場に向ふ。飯、副食物を受けて歸るにも號令である。途中で上官に會へば勿論敬禮する。一見窮屈な様だがこれ程規律立つてゐると愉快に感じられる。室に歸つて分配して食べる。麥飯の臭がふんと鼻を刺戟する、麥飯を食べた事のない僕は食べにくかつたが空腹に於て食べて見ると案外全部食べら

れた。食器を洗つて棚に整頓する。食後の体操をして居るのであらう元氣のよい號令が聞えて來る、暫く休息してから上等兵殿の先導で浴場に行く。入浴も中隊毎で何時から何時迄と時間が定まつてゐて其の間に入らなければならぬさうだ。入浴から歸つて、酒保に行き午後七時半頃まで營内を遊んで歸る。點呼は八時半でそれ迄に室の掃除を行ふ。間もなく週番士官が來たらしい。あちらこちらの室から號令や叱責の聲が聞えて來る。點呼がすむと兵士は勅諭を暗誦するのがきまりらしい。九時に消燈だ。消燈後は絶對話をしてはならぬのである。状態の様になつた毛布の中に潜り込んだがはしかくて、暑くて眠れない淡い月光が窓から流れる様にさし込んでゐる、兵營宿泊第一日も無事に終つた。軍隊生活の一端を體驗した喜びに浸りながらいつか夢路を辿つていつた。

## 兵營宿泊第二日 (九月十日)

月光をたよりに時計を見るに未だ三時半である。不寝番の足音だけがこゝこゝと聞えて來る。皆な目を醒してこそ一語をしてゐる。昨夜は一睡もしなかつたと言つてゐる者もあるが、ベッドで而も毛布がはしかがつた爲であらう。五時に點呼がある。喇叭の鳴るのがもしもかしい。上等兵殿からこの部屋には南京虫は居ないと聞いて安心して眠つたのだが身体がかゆくてしかたがない。南京虫にやられたのじやないかと思つたが蚊張に大きな穴のあるのを發見してかゆいわけがうなづけた。

時正に五時刻曉たる喇叭の音が營庭に響き渡つた。「待つてました」とばかりに跳び起き上衣を着け靴を持つて階段を下りた。兵隊さんの階を段下りる様子など實に整然としてゐる。僕等が學校の非常呼集の

時の階段を下りる様段ちがひだ。この点大いに見習ふべきだと思ふ營庭には既に集合してゐる者もある。軍服の間に混つて点々白服が見える。集合整頓が終ると週番士官が廻つて來る。週番士官は一人一人の服裝態度を見てゆき違反でもあると手びごく怒る。併し僕等は學生であるから碌に見ないで過ぎて行つた。點呼を終ると軽い体操をして朝の清々しい空氣を腹一杯呼吸した。部屋に還つて掃除をしてゐると營庭から「おう」といふ銃剣術の勇ましい掛聲が聞えて來る。六時半朝食當番が炊事場に行つた。朝早く食べる麥飯の味も亦格別である今日の豫定は各種兵器の見學である。九時營庭に整列、先づ將校劍道場と思はれる部屋で看護長殿より止血法、人工呼吸法に關する實施指導を受ける。次いで軍用犬に關する話、並びに實施練習を見せて貰ふ先日の演習に参加して十二里の強行軍をなしたにも拘はらず八尺ばかりの躰を乗り越すのを見て實際「すごいなあ」と思つた。近時各國に於て軍用犬の利用が目覚しく、傳書鳩と共に極めて重要視されて來た我が國に於てもこれが訓練に努め各師團に軍用犬専門の部隊を設けられてゐるといふことである。次に九二式機關銃の説明を聞く。この機關銃の特長とする所は各種の彈丸を發射する事が出來るとし、又彈丸の大きさも從來のものより大きく、戰車の鐵板をも貫く性能を有する。第二には照点が環になつて照準するときはその環の中に照星が來る様にすればよいので便利である。第三には望遠鏡が取り附けられ分隊長が敵の位置を確めるに都合がよいといふ点である。説明して下さる將校も「近時擬敵國ソビエト機械化兵團の進歩實に驚くべきものがあるが、數こそ少ないがかく優れた性能の機關銃を有するし、これを使用する兵士の熟練を以てすれば何等恐るるに足りない。」と、力説さ



れた。輕機銃は從來のものと少し違つてゐる。即ち從來のものは二脚であつたが、三脚となつて前後左右上下自由自在に廻轉出来る点である。次に歩兵砲中隊に行く平射、曲射等の歩兵砲の説明を聞く。歩兵砲は主として敵の機關銃・戦車を撲滅する火砲の一種で、常に歩兵の行動と共にするものである。朝から曇り勝つたが遂に降り出した。丁度正午であつたので各自部屋に歸つた。晝食を済まして暫く空機銃を見守つてゐた、僅か三日足らずの宿泊に雨など降られては憂鬱にならざるを得ない。天も我等の切なる願を入れたが、雨も止んで微笑ましい太陽が顔を出した。再び營庭に集合砲兵聯隊見學に出かけた。營庭にづらつと山砲野砲等種々様々の大砲が精裝されて並べられてある様子は一大偉觀である。二三の大、中口砲及び其の附屬器具の説明を聞いたがはつきり理解出来なかつた。見學がすむと兵舎に歸つた。

夕食後點呼迄慰問の活動寫眞を見た。八時三十分點呼無事終了消燈と共に毛布の中に跳込む。昨夜の睡眠不足の爲今日はすぐ寝つけた。眞夜中大きな聲に驚いて目が醒めた。向ふの部屋に電燈がついてゐる。週番士官があつほう大きな聲で怒鳴つてゐると思ふスリッパの音が聞えた。兵はじつとしてゐる様だ。愛情を以つて指導する一方嚴格なる軍人氣質の現れであらう。時正に一時、前の者と交代して不寝番に立つ。兵士について各室を靜かに見廻る。歩きながら小聲で説明して下さる不寝番は室の通氣とか火氣などに注意するのみならず、兵士一人々々にも風を引かぬ様に細心の注意を払ふのである。一時間見廻つて次の者と交代再びベットにもぐり込む。

### 第三日 (九月十一日)



## 縣下中等學校聯合演習記

五年 西島雅彌

若人の意氣天に沖し、秋晴なる十月十三・十四日の兩日、吾々四・五年生二百余名は湖西鑿庭野に於て開かる第六回滋賀縣中等學校聯合演習に参加せり。我が彦根中學軍は北軍第二大隊となり、川崎第二大隊長殿の指揮に屬す。一同元氣横溢。長曾根よりけり丸々に分乘し若き他の中隊の戦士と共に故山に別れて、戦地今津に向つて出航。湖上は昨日の餘波を受け波高く、一天雲低く迷ひて怒氣を含める浪を蹴つて一路西、今津に向ふ。船足はぐんぐんと伸び行き、多景島をすぎて竹生島に寄港す。此處より戦況に依り、今津港に向ひ港口近くにて敵前の上陸戦闘を開始し敵を撃退せしめて威風堂々上陸。先づ橋本先生の御出迎を受けて感謝に堪へず。此處にて晝食をとり、再び行軍を起して遭遇戦を豫想しつ、安曇川左岸に向つて前進。先遣隊は既に自動車に依り安曇川橋梁確保の目的をもつて急進す。朝来の曇氣漸く去り一天かりらと晴れ渡りて、秋の日は高く昇り燦々と我々の上に光を投げかけ、彼方・此方に戦士輸送の自動車走りり白塵濛々と立ち上り、軍馬の嘶き四方に木魂し戦機將に熱せり見ゆ。やがて安曇川左岸地區に到着し、吾が部隊は火線構成し終りぬ。時將に午後四時三十分戦闘の幕は切つて落され、次から次へと前進し、射撃の命令下る。吾々は前方に點々敵の姿を認め、愈々敵目前に迫るや、我が軍は

今日は喇叭の鳴つてゐるのを知らなかつた。隣の者に起され眠い眼をこすつて出て行つた。今日は陰隊日だ。やはりなんともなく家が暮はしい。萬事萬端規律づくめの生活に馴れない爲だらう。九時頃名残を惜んで營門を出て伏見稻荷神社参拜午前十二時二分發一路彦根に向ふ。學校に歸校した時は正午過ぎであつた。此處に無事に兵營宿泊を終了する事が出来た事を喜ぶと共に多少なりともこの機會に得た處のものは日常生活に應用しよう決心した。僅か二日間の日數なる爲實施教練が出来ず、何等の疲勞も苦痛も感じなかつたのに歸校した時校長先生より「御苦勞であつた」との御言葉を戴いて恐縮したのである。併し見學の中にも得る處が充分あつたと確信し、主なるものを擧げると次の如きものである。

一、上官絶對服従。——我が國の軍隊の最も誇りとし最も恃みとする所は實に此處に存するのであらう。御勅諭をよく奉戴して上官の命令に降下命令と心得て上官の命であれば水火をも厭はないといふ軍人精神の一端を経験する事が出来た。

二、兵器の充實。——新聞や雜誌等で外國の兵器の性能を讀んで「日本にもかゝる兵器、もしくは之に對抗し得る兵器があるであらうか」と恐れた事があるが、それは兵營生活で兵器の一部を見、その性能を聞いただけで杞憂に過ぎない事を知つた。



全線敵に對して猛烈なる射撃を開始せり。黄金に實れる寂たりし田園も一轉して今や阿修羅の巻化しぬ。前進！前進!!! 又前進!!! 恰も時々刻々と敵弾は勇士を地下に送り行けるが如く、戦死累々悲惨の血河は地上の涙か。飛び来る弾は情け容赦もなく數多の勇士はかくて打斃れ、土塵と煙に包まれつ、阿修羅の荒れ狂ふ光景には絶叫し怒號しつ、馬は驚れて友軍は蹄の露と消ゆるかと思はせる實戰其のま、の景觀をなしたり。……時に中隊長の聲物凄く「突撃に……前」の命下る。萬雷一時に落ちしかと思ゆるばかりの絶叫に、敵もさるもの此に應戦し、あわや方に肉弾戦に移らんとする時しも休戦ラツバ高らかに響きぬ。再び道をこつてかへし、飯炊事にうつる。夕日華やかにさして、遠近の家に灯もつきたり。第一小隊は小哨となり、前方の敵に對して警戒し第二小隊は銃前哨となりて警戒。炊事の煙高く上りて、やがてガチャ／＼と食事の音す。

夜空に星は瞬け月なし。五六間先の人影さへ見えぬ、ねばたまの闇夜。夜風痛く面をこすり夜氣ひし／＼と身にせまる。淡い電燈の色に冷たく白く、銃身は光る。時々敵の斥候の來る爲にか、所々に銃聲聞ゆ。「唯か？」の誰かの聲も闇の中に吸ひ込まれて行く。

午後八時第三小隊は敵を襲すべく出發す。

まづ歩哨・下士哨を退却せしめ、敵の小哨本隊に迫る。敵は突然前方に於て吾が影を認めしが、猛然として機關銃を發射す。がくて敵の小哨を全滅して我等は本隊に歸りぬ。

然るに又銃後間もなく敵夜襲し來り、本隊近くに迫りぬ。驅斥斥候の「氣をつけ！」の聲と共に、吾が中隊は抵抗統に就き發砲して之に

對抗す。やがて敵も退却し去り午後十一時戦況中止となりぬ。附近の民家に入り一時まで休息をみる。民家にてはお茶・果物等を出し下され厚くもてなされる。うれし。午前一時。家族の人達に厚く謝して出發午前二時、五合出踏切を出づ。先程まで暗れたりし夜空は、又もや昨日の如く暗雲に包まれて行く。冷たき風は遠慮なく我等の頬を打ち殆んど手も痺れるばかりに冷えきり、ふる／＼と幾度か身震ひをなす時たま、びし／＼と氷の様な冷き雨の頬を横なぐりに打ちつけるもすさまじ。然れども我等は勇往邁進し、凍死しきうな冷徹たる夜氣もものはたし難音勇ましく大供高地に差しかゝる。靴音と寒氣の外に何もかも存在しない。彼の前方に突然。ダツ／＼と我が軍に對して猛射撃を開始せし土民軍の一隊。我も取りあへず小銃を以て應戦に努む。黒く累々たる岡の中腹よりは、パツ／＼と赤き火を發して壯觀。相當多數の土民軍らしく、小氣味良い小銃の音が冷え切つた夜氣をすぐく震はして行く。此の敵を撃退せしめて再び行軍。又もや土民軍の一隊の襲撃に會し再三・再四土民軍を撃退しつゝ、更に行軍す。前方の山は黒く眠り、野邊の草木今尙覺めず、蜿蜒と續く凸凹の道は行けども／＼更に盡きず。月は出てす雨模様空の下なる二三箇の細い光を目前に、歩速物凄く前進／＼。泥濘甚だしく、行けども／＼目的地尙遠く其の上畫の疲勞の爲殆んど無意識の行軍。時々ふらつ／＼としつゝ、酔人の如く歩いてゐても事實歩いてゐる者も衝突することあり。傍の薄や雜木が人の如く思へ敵／＼思へばさにあらず。然れども道尙遠く恰も吹雪の夜、道に迷ひし旅人が知らず／＼の中に死の眼に落ちて行く如く、我々もふら／＼こつん。ふら／＼こつん。ミ左右に衝突しつゝ進む。

やがて突撃ラツパ。「突撃に……」と小隊長の刀先一度弧を空に描きながら前進!! 決戦!! 死!! 死!! 相方の銃劍の尖がきら／＼と無意味に輝く。血に飢えた刀先は我に接近しあり。「突込めッ!!」絶叫!! 聲もかれよ、喉も裂けよと起る突撃の聲!! 正に肉弾戦に移らんとする間一髪。

休戦ラツパは劉曉と四方の木々、山々に木魂す。戰士の瞳は血走り顔一面に緊張の色漲り、壯絶此の上なき光景。かくて戦闘終了。ふと東を見れば眞紅の太陽は曠漠の平原を眞紅に染めて、我々若人の意氣を激賞するかの如く太陽は軋り出す。見渡せば薄茫々たる曠野に果もなく綴ぎて皆桃色に光輝きぬ。

たゞ長々と續ける兵士の影のみ黒くして、朝日を受けし校旗はひら／＼と翻り、空一面朱に染め出されたり。おゝ!! 何たる壯美壯嚴なる戦地の朝の光景。我は未だかつて、斯くの如き景観は見ず。山上の御來迎にもまして壯嚴なる日の出なり。我等は二日間の疲勞も今や消し飛び、こゝに意氣揚々として戰場を引き上ぐ。其の間に於ても太陽は我々を照し、我々は演習にて体験を更に加へて一種壯嚴な氣持を與へられたり。やがて行軍しつゝ、後援團隊形に集會す。其の後伊香農の吹奏する軍樂隊にて分列式に列す。彥中の名譽の爲にと心の自らひきしまるを覺ゆ。

つゞいて講評後天皇陛下萬歳三唱。我々一同は嚴かな氣を以て萬歳を三唱す。後朝食を取る。此の時疲勞の一時に來り絶頂に達しぬ。日は照りつける下に終始「氣をつけ」の姿勢。よくもあの場合皆の者が堪へ切つた事かと感ぜしむ。やはり心の緊張が第一なり。氣の張りが第一なり。再び饗庭野を下りて午前十一時みどり丸に乗

目的の三軒家は未だ見えず、全く一時は絶望の聲さへ出でんとするを何くぞ。これ位で。我には赤き彦中魂ありクミ氣をひき緊め／＼更に前進／＼／＼。やがて幾度か岡を越え／＼て後、目的地三軒家に着きぬ。やれ／＼と思ひしやいか、其處へ着くなりべた／＼となつて眠る。幸ひ露が下りてゐなかつたのは有難し。夜は靜かにふげ行きぬ。二三の語聲も夢にかき消されて――。

× × ×  
類々ミ身にせまりくる冷氣の爲不圖眠を覺す。身体はがた／＼と震へ、身体一面にミリは、だを生ず。唇は白く乾き切つてしまつてざら／＼せり。眼は不眠の爲にか、一向はつきりせず頭のみびんせせるを覺ゆ。この心地誠に心に徹しても口に言ひ得ぬ事なり。恰も背囊枕に寝ますがら、眠れぬ朝の大吹雪の感ありて滿洲の野に在るが如しほの／＼と東の空は明け初めぬ。薄の霧は白く綿の如くふくれて朝風に揺げり。やがて拂曉戦の位置につく。荒涼と果しなき饗庭野も半時間後には、悪魔の叫ぶ修羅の蒼と化すならむ。前方の山も漸くほの／＼と分明せるころ、やがて疎開隊形となる。東の朝は曙の色赤く輝き初めぬ。かくて煙花黄龍、喇叭を合圖に攻撃は開始されたり。進撃!!! 攻撃!!! 發砲!!! 攻撃!!! 惡魔も戦慄せんばかりの砲聲硝煙。長々々續く大平原!!! 其處には今や朝と共に日本青年の濺れたる意氣ぞ漲り溢るる。黄煙彼方に起り瓦斯攻撃と見てゐるや喇叭一聲鳴りて防毒面を着す。不圖下を見るに、すつくりと名も知らぬ白き花の二・三本咲きあり。戦地戦團のたゞ中ながら、何んたる清淨無垢の白き花ぞ戦にすさみ切つた吾が心に一味の暖を添ふ。彼我の銃聲は益々猛烈となり、實戦なら如何に多くの悲劇・犠牲が演ぜられる事かと思ひやる。

り歸彦す。此の演習は實に壯烈にして且困苦なりき。然れども此の体験に依りて得たる献身的奉仕・堅忍敢爲・協同團結の精神は心ずや將來に於て我等の生涯に貢献する所大なるものあるべし。

— 完 —





# 修學旅行記

## 第四學年

五月三日 第一日目

新緑薫る五月三日、燦と輝く午後の日を浴びながら、浮立つ心に足も軽く我等は校庭に集合した。誰も「嬉しいね。」とは言はないが、その喜は満面に、涼しい身仕度でありくと現はれてゐる。

校長先生の御懇切な御訓示を戴いて後、愈々一週間の旅に向ふ。乾き切つた路上を、自動車の埃を浴び乍ら驛頭に至る。點呼の後ブラツトフォームに出る。日は大分西に傾いてゐる。明日はこの夕日を何處で見事だらう。待ちに待つてゐた修學旅行は、遂に我等の眼前に來た。修學旅行も、我々をして「上級生になつたのだなあ。」と言ふ自覺を促す事項の一つである。

やがて眞黒な汽車が、ずる／＼と構内にすべり込む。多數の先生のお見送りを受けて、金龜城下彦根の町を後に一路西へ西へ……。車中の談笑が耐になる頃、ガタン／＼のたくつてゐた汽車は、何時の間にか追つて來た夕闇に捕はれてしまつた。その頃から車窓に赤い灯が次第に増す。鏡の如く白く光れる、懐しの琵琶湖にも別を告げて我等はやがて灯の海京都に躍り込む。京都驛で下車し、半時間程の自由行動が許された。直ぐ又驛頭に集合、今度は下關行の汽車に乗る。

るけ込んで了ひさうだ。

(中川敬二郎)

五月四日 第二日目

船は漸く棧橋を離れた。原始林を抱く彌山を征服した我々を載せて……。流石名に負ふ紅と緑との絶景！。其の朱塗の廻廊、鳥居、森嚴な森、雄姿を横へる彌山は、船の進むに従つて、漸く霧に包まれて行かうとしてゐる。何時又來られるか知らん、と云ひたいやうな氣持で何時迄も、眺める僕だつた。

十分、汽車は宮島驛を發した。

沿道の景色の移り行く愉快さに、暫くは我を忘れて眺め入る僕等であつた。

山に入り、野を過ぎ、海岸に出でて、五月の山陽の情景を満喫した頃、「あ、錦帯橋だ。」と、あちこちで何か發見した様な叫びが湧起つた。「おや。」と思ふ間に、汽車は岩國川を素通りして、山に遮られて了つた。例の太鼓橋であつた。

さん／＼騒いで悪戯した後、申し譯の様に眠つた僕達だ。ついで／＼とする。暫しまごろんだのであらう。車窓を眺めて見ると、汽車は海岸に出て居たので。紫を交へた白銀の空が、波の間に／＼ほのかに反映してゐる。波が頻りに渚を洗つてゐる。其の度に、白刃の様に閃くのが微かに窺はれる。が、その音も低く波の背を走つて、やがて霧の中に溶け込んで了ふ。朦朧とした霧の彼方に、低く連る翠巒は、未だ夕の眠から覺めきれないものの様に、なだらかな影を小波の背に落してゐる小さな島が散在してゐる。帆掛船が浮んでゐる。今まで繪に見たり、話に聞いたりしてゐた事を綜合して、想像してゐた情景と少しも變らぬ、實に繪のやうな内海の眺だ。島の傍に帆掛船の浮んで

皆んながそろ／＼家へ手紙を書いたり、本を讀んだりし始めた。僕は空氣枕を出して、格好よろしく睡らうとしたが、慣れないせいかかなか／＼睡れない。眠ましたり、縮めたり色々やつて見るが一向駄目だ。「えい。起きてしまへ。」と。枕を網棚に抛り上げて、車内を見渡した誰も寝て居らない。かくして第一夜は殆んど一時間も睡らないで喜びと興奮との中に明して了つた。第二日の空が白む頃、我等は廣島平野を走つてゐた。大崎先生のお言葉の中に屢々出現する廣島市は、朝霧の中から今日を醒したばかり。毛利氏の居城であつた鯉城は、遙かにその雄姿を現はす。それから後は海岸傳ひに宮島驛に至る。小さな琵琶湖の遊覽船位の船に乗つて、日本三景の一、嚴島に向ふ。船上から探し求めてゐると、あつた、あつた。朱塗の宮居と大鳥居とが新緑の島影にくつきり見えてゐる。近づくに連れて、小さな鳥居がだん／＼大きくなつて來た。朱塗の色は少しく剥けてゐる。上陸して宮居に達し、案内人の説明を聞きながら廻廊を一周する。直ぐ又身仕度を整へて、今度は彌山登山にかゝる。紅葉谷の溪谷を過ぎ、美しい道路をぐん／＼登つて行く。皆んな昨夜の睡眠不足もあつて、大分疲れて來た何葉と勵し／＼、三十丁足らずの山道を強行軍で踏破してしまつた。頂上の神社にお参りして、眼下の瀬戸内海を見下した景は、實際何とも言はれない。時間に迫られて直ぐに下山、再び嚴島神社の所まで下りて來た。燈籠にもたれて全景を見渡す。満ち始めた潮に美しい朱塗の廻廊が映えて、ゆら／＼揺れる。砂の上を鹿が走り廻つてゐるかと思へば、汀に足まで潮に浸してゐるその景色。優しい造りの神社と共に、全く繪の様な静かな／＼平和の姿。かうして石燈籠にもたれて眺めてゐると、身も心も吹き來るそよ風に織り爲されて、この嚴島にと

ゐるのは、一幅の繪の様で、車窓に寄りか、つて一筆さば思つたが、生れつき下手な者ではと氣付き、少し悲觀した。時間は一分と、百望の景と共に過ぎ去る。汽車は急カーブを過ぎたり、數多の小さいトンネルを越したりして、尙もぐん／＼進入してゐる。

「徳山の海軍燃料廠は何處だ。」等と、云つてゐる間に、汽車は間もなく下關に着き、直ぐ連絡線に乗り込む。思つたより近い九州が、直ぐ對岸に高い禿げた山々を見せてゐる。本州とも愈々お別れだ。吹く潮風に頬を向けて……。僕等は恰も異國の旅に上るやうな氣がした。波が高い彦島の裏手から押し寄せて來る、日本海の怒濤だ。船舷に當つてはどつと砕ける。じつと見つめてゐると、波の持つ獨特の姿に魅せられて、その強い力、強い響に引付けられて、何時か血潮の高鳴るのを覺える。雄大な、壯大な、何と云つてよいか解らぬが、僕の眼の底にはびつたりと今も尙はつきりと、波の姿が焼き付けられてゐる。湖のそれとは違つた、波頭と波頭の間の長いこと、そして其の色の深さ、凄さ。流石海は寒い程である。海は飽くまで澄み切つて水母の泳いでゐるのも珍しい。小松原先生のお話によると、もう少しするに艦隊の此所を通るのが見られるのださうな。大小數多の船が、さ／＼の形で裝飾されて、或は碇泊し、或は波を冒してふわり／＼と船船の間を縫つてゐる。

門司で汽車に乗り換へ、小倉、戸畑の工業地帯を過ぎた。多くの煙突を立て並べ、それからは濃々たる黒煙を吐いてゐる。八幡製鐵所の側を通つた。北九州工業地帯の偉大さに驚かされた。

何時の間にか又眠つてしまつたのだ。

やがて福岡に着き、直ぐさま驛前に整列。流石福岡だけあつて賑か  
だ。宿屋に行き、荷物を下して、西公園に参るべく電車に乗つた、商  
店・家屋は走馬燈の様に過ぎ去り、やがて新緑の生氣薫る西公園に來  
た。一同参道を颯爽と歩く。先づお宮に参拜した。自ら静まつて話聲  
さへ聞えなかつた。皆明日行く東公園や、管崎宮の事でも浮んだので  
あらう。「何事のおはしますかば知られぬもかたじけなきに涙こぼる  
」。の感は、唯伊勢神宮ばかりではない。参拜後、自由解散を許された  
ので僕等十人程と大崎先生とで、宿屋の案内人について、翠緑の樹々  
より洩れ出づる清澄の氣に浸りつゝ、丘上の眺望臺より博多灣を下瞰  
す。防波堤に圍まれた灣内は、實に静かで、さながら夢の如く眠る  
やうであつた。直ぐ側に築港記念大博覧會の會場が見られた。平野國  
臣、吉岡天佐の像を見て、西公園に別離を惜しみつゝ、大濠公園に向  
つた。

彦根の其れとは異つた、大きな沼を圍んだ、綠滴る様な新緑の公園  
附近の文化住宅の沼に映する様は、恰も西洋の風景畫を見るやうだつ  
た。此の公園は前に行はれた博覧會會場の跡を、公園にしたもので、  
濠は海に續いてゐて海水を湛へてゐるさうだ。

随分疲れ切つて、宿に歸つた。最初の宿泊まで皆大はしやぎ。騒ぎ  
爆笑が到る所に起る。

夕飯を終へて、友達と驛前を散策した。學生が通る。初夏らしい心  
地よげな東風に、輕やかな和服の袷が覗く。モダンな何となく帽子  
を、今にも落ちさうに強くカールした髪は横に、ちよこなんぞ載せて  
ハイヒールの靴音高らかに、怒々夜の街を闊歩する、近代女性も交  
る。新調の夏服に、今買つた許り言ひたい様なステッキを振り、煙

暫く神宮の説明を聞いて、神社内を拜觀した。

それから東公園へ行く。お、忽然として現はれた巨大な日蓮上人の  
像。嗚呼また畏れ多くも龜山上皇の巍然として異國の空を凝視し給ふ  
神々しき御姿！銅像前に整列して最敬禮、我々は眼頭熱くなるのを  
覺えた。

長くも貴き御身を以て國難に當らせ給うた龜山上皇、嗚呼これこそ  
上下一致の具現である。異國の歴史を繙くに斯くの如き融合團結が、  
何時の時代に、何處の國に、見出されるであらう。神の國、此の神聖  
なる皇國を防ぎ給うた龜山上皇、今日の我が膨脹日本を覺し給うて、  
微笑み給ふであらう。

亦一代の快僧日蓮、畏れ多くも今龜山上皇と地を同じくし奉つて、  
玄海の彼方を睨んでゐるのである。鎌倉時代に於ける彼の提唱した立  
正安國論の余波は、總べて彼に對する迫害となつて報いられたのであ  
る。此の爲彼は白刃の下に、幽明の境を彷徨したのである。

嗚呼！されば偉大なるは信念の力、時代の潮流の渦中に、時代への  
叛逆兒として堂々信念に生き抜いたのだ。而して此の如き國民の固き  
信念が、遂に元寇の勝利を獲ち得たのである。

嗚呼！人よ、刮目して欲しい。彼の唇には信仰に浸る法悦の笑と共  
に、玄海の灘を渡り來れる天來の光を、嬰兒の如く吸ひ込んで、心の  
花の大きくゆら／＼と開けた歡喜の笑が、漂うてゐるではないか。

無限の鼓吹と無量の感激とに、小さな胸の動悸を覺えて、福岡武徳  
殿を見て市中を歩く。折から雲散じて、南國九州の太陽が顔を出し始  
めた。世界の生活の急變を集めて、關門海峡を矢の如くに貫く潮流の  
余波を受けて、大陸文明に早くより息づく人形の町、博多、それは美

草を懐らしながら行く紳士、フェットの首も輕やかに、上品に召した  
和服の裾をさばき乍ら、何か樂しげに話し乍ら行く若奥様風の人、總  
べてが、生氣溢刺した近代の若人だ。兩側の、輝くばかりのショウ  
ウインドウに、此等の若人の瞳は輝く。又、此等の人の味覺をそゝる  
如く並べられた、新鮮なフルーツの香が、澤山の人込みの中を縫つて  
流れる。

二三の者が、「首相の實家を見て來た。」と、云つて歸つて來た。皆  
樂しげに語り乍ら靴の手入をしてゐる。

誰かの吹くハーモニカの靜かな甘いメロディー、騒々しい友のさゝ  
めき、微かな寢息、便り認めるベルの音、自動車、車の通る音、容易  
に寝つかれさうもない修學旅行第一夜、福岡の夜は更け行く。

### 五月五日 第三日目

午前六時、元氣に起床、空は曇つてゐる様である。

樂しい朝飯の後七時から、小野先生の御案内に依つて、市中見學に出  
發した。先づ電車で管崎宮に参拜、車中で九大生に乗り合した。流石  
に九州最高學都だなど頷かれる。

狭い町を通り神宮前で電車を捨て、拜殿前に整列した。管崎宮は  
官幣大社で應神天皇を奉祀してゐる。四邊には森が茂つてゐて、神さ  
びた樓門は森殿の中に、今も命昔を語るが如く立つて居る。此處が嘗  
つての元寇の際、襲來した所だに聞いて、今昔の感轉た大なるものが  
あつた。されば此の邊の松嶺は、兩軍の鉦鼓の響、雄叫びでなくてはな  
いであらう。又、玄海の狂瀾の音は、我が神國男子の凱歌ではあるま  
いか。仰げば龜山上皇御筆筆、「敵國降伏」の四文字が躍々として躍  
り來る様に思はれた。

はしの町だつた。アカシアの並木のヘアメント、それを闊歩する影  
は長かつた。都心は木々の新しい空氣を吸つて生きて居た。電車通よ  
り離れた、かうした廣いメーンストリートの總べての影は長かつた。  
都心はエメラルドの様によく澄んで居る。だのに一歩都心より離れた  
ならば、雑々とした町である。一見して生活の底流が。それが九  
州の共通な特異性でもあらうが、一殺伐性を帯びてゐる事が知られ  
る。此が大都博多の鼓動なのである。

九大横を通つて驛へ着いたのは、十時であつた。

期待を新にして、暫しの縁を惜みつゝ、十時半出發して二日市に向  
ふ。博多驛でバナ、を五十銭が買つたが、四人でペロリ、随分食べた  
ものだ。十時五十分、二日市着、早速十五番のタクシーを連れて都府  
樓へ向ふ。途中車を止め、榎木寺を窓外に見た。管公隱居の跡は、今  
は神社となつて、こんもりした森に納つてゐる。右に天拜山を見て自  
動車を飛ばす。間もなく都府樓古趾に來た。大きな礎石が十數基、青  
々とした草の中に、僅かに昔の柱の位置を示して居る。小高い所に都  
府樓古趾の石碑がある。其の前で説明を聞く。何處かで蟬の聲が聞え  
る。此所にも南國調が溢れて居る。もう夏だ何だか冬服を脱ぎたくな  
つてきた。

それから觀世音寺に向ふ。本堂の向つて右の鐘樓で、説明者が鐘を  
ついた。靜かな／＼美ばしい音色だつた。靜かに余韻を引いて、小遊  
子の聲にさゝやき來るのだつた。此こそ一千年前、朝な夕なに、管  
公の胸を離たせた鐘だ。その韻律を分析したら、一都府樓樓看瓦色、  
觀音寺只聽鐘聲。の句が、千古の悲愁を守つて澄んでゐるかも知れな  
い。流離の悲愁に泣く此の句が滲み出るかも知れない。遊子は暫く低

御して居た。總べてが悲愁史だった。

三たびタクシーを拾つて間もなく大空府町に入る。何となく古めかしい。大鳥居前で下車する。沿道は菅公に因んだ土産物を賣つて居る。大鼓橋を越えて拜殿前に整列、英靈に敬禮を捧ぐ。神殿の左の飛梅、説明者の言に依るに、菅公の跡を慕つて飛んで来た梅ださうだが、よしそれが傳説であるとしても、詩人に相應しい雅かな話ではないか。

思ひは、自づと千年の昔に馳せる。入相の鐘、夕を呼ぶ鶉の聲、菅公に斷腸の思ひを促したのも尤もである。配所の月を見、天拜山を仰いで、京の月を思ひ、故郷の山を思はれた事であらう。朝に夕に、天拜山で天に對して冤を訴へられる公の悲しい姿、清涼殿の御宴を思ひ、御衣を捧持される悲しい姿が、私の眼底に溢れんとする涙に映じて居た。

三々五々、神苑内で晝食を認める。庭は風流詩人に相應しく泉石の趣に富んで居て、赤毛氈の茶屋も風情があつた。

かくてタクシーを連れて二日市驛着、熊本へ向ふべく汽車に乗り込んだ。

汽車は今、廣々とした筑紫平野をひた走りに走つて行く。——我等修學旅行團一三〇余名の興奮を乗せて。——車中は相變らず談笑に花を咲かせる者、トランプ等にうち興する者、或は昨夜來の睡眠不足を此の時に取り返さんと、ヨツタリ／＼居睡る者等々色々だ。汽車は青々とした麥苗の間を、黄金色の花咲く菜種苗の中を、或は黄櫨の木の茂みの間を通り抜け、活り抜けて、尙も蒼蒼を續けてゐる。やがて、久留米市に近づく頃ほび、轟々恰も遠雷の如き音を立て、鐵橋にかゝる。名にし負ふ筑後川の流れた。元弘の昔、南朝の忠臣菊池武光が

榎真親王を奉じて敵將大友頼尙と一戦を交へ、不幸敗慘の涙に咽んだ古戰場だ。あゝ、月日は流れ流れて六百有余年、筑後川の流は、昔も今も變る事なく滔々流れてはゐるが、其所には昔を偲ぶすがは何一つとして見當らない。

何時の間にか、汽車は徐走してゐた。久留米市だ。——久留米市は筑紫平野の中心地として、商工業都市として著れ、久留米耕・福岡足袋で世間に長く知られてゐる。

尙又過ぐる昭和六年、上海事變勃發の際、忠烈鬼神をも哭せしめたあの肉弾三勇士の出生地たる事も忘れ得べからざる事である。——數分の後此の地にもお別れして、更に南下す。

化學工業都市として著名なる大牟田市を過ぎて間もなく沖の不知火流れて消えて、月の有明夜が白む。『てふ有明海が、車窓より眺められる。暫く海を見得なかつた我々の眼に、一種の慰安を與へて呉れる。汽車は海岸を左手に、それ／＼になつてフルスピードで走つて居る。

丁度午後の二時頃まで、海はずつ／＼沖まで潮が退いて、白い砂地の上には、小さな漁船が幾つも／＼引上げて並べてあつた。僕達は汽車より降りて、静かにゆつ／＼と此の海を眺めたい様な氣持になつた。窓から首を出して覗いてゐる中に、もう見えなくなつてしまふ。

菊池川を過ぎるともう田原坂が車窓の左に見えて来る。丁度其の時汽車は山と山との間の峽の様な所を通つてゐた。「雨は降る／＼人馬は濡れて、越すに感されぬ田原坂。

右手に血刀、左手に生ま首、馬上豊かに美少年……」まで歌に歌はれたのは、實に此の地なのである。次の驛の植木と云ふ所と共に、甲戌の役に於ける激戦地である。熊本城が賊軍の爲に十重廿重に圍まれて

今にも陥落しようとしてゐる報を聞いて、福岡方面より救援に赴いた官軍が此處で賊軍と衝突したのである。……雨は篠つく様に降つてゐる。官軍賊軍より打ち出す大砲の音は、天地も動せん許り。其の中に昔に大刀を貰ひ、袴の股立も高く、小髷のはつたをきり／＼と鉢巻でしめた薩摩軍人と軍服軍帽に身を固め、新式の西洋渡來の銃を手に持つた官軍とが、互に鎬を削つて戦つてゐる。砲煙四邊に立ち籠めて、彈丸は雨霞を飛んで来る。突撃の鬨の叫び、雄叫びの聲、山には累々たる屍が重り合ひ、川には鮮血流れて肥薩の天地に秋は悲しい……

我等が此の激戦の跡を眺めて、想像を逞うしてゐる中にも、汽車はそんな事には一向お構ひ無く、どん／＼過ぎて、早やもう此所は熊本平野だ。線路の兩側には、一面に何處／＼までも續く麥苗だ。併しその一本／＼を良く眺めて見ると、どうもその様子が麥のそれとは少し異つてゐる様だ。葉が細くて莖のひよろ／＼してゐる様等……尙よく見ると違ふも道理、それは何と皆粟の未だ小さいのだ。それは皆粟苗だつたのだ。熊本平野に粟が多いと云ふ事を地理で習つて居たのを忘れて居たつて。目指す吾等の第二の目的地ももう直ぐだ。一回下車の用意にさりかゝる。

かくして吾々を乗せた汽車は午後三時五十一分、熊本驛プラットホームに迂り込んだ。

此所熊本市は、熊本平野の中央に位し、古より吾が彦根の如く城下町として發展して來た町なのである。だから熊本は、歴史の國であり文化の都であり、又名勝の地でもあるのだ。其處には天下の名城熊本城を始めとして、探るべき名勝・史蹟が數多く點在してゐる。曰く、水前寺、本妙寺、畫面湖、武藏塚等々。今宵一夜の旅を託する藤江

旅館は、直ぐ驛前に、三階建てのその堂々たる姿を見せてゐる。其處に靴を預けて、直に電車で熊本城に向ふ。此の旅行中最初の、而も一度限りの城の見學だ。同じ様な城下町で、朝な夕な城を仰いで暮してゐる我々にとつては、とりわけ縁の深いものだ。歴史で學び、地理で聞いた熊本城、我等は大きく目を開き、充分耳を働かせて、此の城を観察しようではないか。どんな所が我が彦根城と違つてゐたらうか？ 知らず／＼好奇心でも云はうか、未だ見ぬ物に對しての憧憬の念が湧いて來て、心は早く／＼と急ぎ立てる。

此所の電車は、福岡の様には揺れなくて、乗心地が良い。又、町の屋並も揃つてゐて、町幅も廣いし、それに黒々とした街路樹が一段と美景を添へて、見てゐても何となく感じがよい。呉服町・河原町・皆メーンストリートなのだ。なか／＼大きなビルディングも目に映る。「處變れば品變る」とは誠にこんな事を云ふのだからうか。驚いた事には、町を通つてゐる中學生も、女學生も、皆夏服を着てゐるのだ。「矢張り此丈南に來てゐるのたなあ。」と思はす感心した。

公會堂前で電車を捨てる。此の邊は所謂官衙地帯で、市公會堂とか市役所、陸軍銀行社等大きな建物が多い。アスファルトの廣い道が通じてゐる美しい道だ。そして、熊本で見る日光は幾分それに白さと強さを加へて、青葉若菜の上に潔々と降り注いでゐる。もう全く初夏の候だ。九州男子の意氣と熱さが躍つてゐる。歩いて、も何となく愉快だ。

しつくりとして、落着があり、そして又その反面非常に活氣が溢れてゐる町——之が我々の熊本市で拾つた第一印象だ。

アスファルトの道が盡きると、其處からは山土色をした、此も矢張

り廣い道が、次第に急勾配を爲して曲りくねつてゐる。愈々熊本城に登るのだ。櫓が午後の日を浴びて、緑葉の中に見え隠れしてゐる。『うこそー』と遠來の客を歓迎してゐて呉れる様だ。皆息をはずませながら元氣に登つて行く。次第に背中が汗ばんで来る。暫く行くさ右手にぬつと大きな銅像が見える。之を餘人に非ずして、今は昔西南の酋に、賊軍熊本城を十重二十重に取り圍み、さしもの名城も危く見えかゝつた時、敢然身を捨て、一身を賭して、此の急を友軍に知らせたものと、身には襤褸を纏ひ、顔には煤を塗り、城を出て、途中一度ならず二度までも敵の手に擒へられながらも、或は服従を装ひて、逃亡し、或は又監視兵の隙を見て、齒で縄目を絶ち切り、遂に官軍に到着して、味方の危機を救つた殊勳の主、谷村圭助その人なのだ。一同恭しく敬禮して通り過ぐ。

今更拙筆を弄する迄は無く、此の熊本城は天正十六年、清正公(土)地の人は皆かう呼んでゐる。此の地に封じらるゝや、肥後の半國二十四萬石の領主となり、而して關ヶ原の役後即ち、慶長五年十一月更に家康公より、二十五萬石を賜りて、全封合はせて一躍五十二萬石となり、球磨・天草を除く全肥後の大名に爲つたのであるが、勢ひ以前よりの城では狭きなり、此に於て遂に一代の名將清正公が、七年の日子と巨額の費用を費ひして、城の改築となつたのである。

流石は天下に謳はれる智將清正公であつて、當時の熊本城は東西一軒半、南北二軒の地を占め、東方を流れる坪井川は自づと内濠の用を爲し東南を流れる白川は外濠の用を兼ねて、地の利極めて良く、築城又極めて堅固で、日本三名城(大阪城、名古屋城と並んで)の名に背かぬものであつた。そしてその堅固さ丈から云へば、昔も今も日本隨

一と稱せられてゐるのである。併しながらその後、幾許も無くして細川侯の住む所となり、世移つて明治九年には神風連の騒動起つて、その所に設けられたのであるが、明治九年には神風連の騒動起つて、その襲撃を受け、同じく翌年には、突如として大隅の一角鹿見島に兵變起り、南州翁を推した薩軍は、此の城目指して進撃し、盛に砲撃を加へる。此所に彼の悲壯な籠城五十有餘日の歴史を生じたのである。而るに一夜城内より怪火起つて、折からの烈風に惜しむべし、第一、第二の天守閣を始め、主な建物の大部が一朝にして、烏有に歸り去つたのである。併し幸にして、第三の天守閣たる宇土櫓のみは火災を逃れ今尙巍然として、市の一偉觀を爲し、日夜熊本市民より仰がれてゐるのである。

今は第六師團司令部となつて、その昔は甲冑に身を固めた物見の武士が、朝に夕に遙かに小手を翳して、城下を見廻してゐたであらう。その切り立つた様な城壁の上には、今はカーキ色の軍服に身を固め手にしつかり銃を握りしめた、我が陸軍の精銳が立つてゐた。道の側には火薬庫らしい建物があり、又陸軍衛戍病院等も見えてゐた。爪先立つた坂道を喘ぎ／＼登りきると、もう其處には白聖の師團司令部が見える。幾人もの兵士と將校に出會ふ。

頂上に立つと、我が彦根の城山よりはすつと高い此の場所は、一寸廣くて平らで、天守閣の跡の様な所であるが、目の下には熊本市がずつと遠く迄連つて見える。案内者が色々説明して呉れる。今その言を借りると、「清正公は、彼の朝鮮の役に於て、蔚山の籠城と云ふ苦い経験を受けられたから、此の城の建設に當りては、常に一朝事ある時を考へられて、内には二百幾つもの井戸を穿ち、又竹・楡・樟等

の如き一朝有事の際に役立つ木材を澤山植ゑ込んだり、或はいざ籠城と云ふ時になつても、食料に不自由しない様に、城内でも耕作し得る様に爲し、又一方外に對しては、敵軍城を取り圍みたる時には、外濠内濠の諸川を堰止めて、其の水を湛へ、熊本城の城下を一大湖水と爲しあべこべに敵軍を水攻めにする計迄も樹てられてゐたと云ふ事です。だからこそ、彼の西南の役に於ても、如何に勇敢なる薩摩武士を以てしても、遂に之を抜く事は出来なかつたのであります。そして、此の城の堅固な事は、三百年を経た今日の世になつて、始めて證據立てられたのです云々」。

實際今我々の居る此の一寸した廣場の中央にも、見るも恐ろしい奈落の底に迄も通ずるかと思はれる様な大井戸があり、又城壁の縁に立つて俯瞰すれば、目も眩む許りの險しさで、大阪城等の城壁よりもつゞと垂直的である。毎年の修學旅行記にもある通り、熊本の町は實に木立の町であり、森の町である。而もそれ等は皆青々として茂りに茂つて、前の優麗閑雅な福岡と比べて見れば、生々發展の氣に満ち満ちてゐる様に思はれる。遙か東方の彼方には、明日の登山の目的地、世界一の噴火山大阿蘇と思しき山が、又それを圍む外輪の峰々が、高く低く連つて見える。下の方では軍用犬の勇ましい吠聲が聞える。

漸くして城を下る事になり、今度は道を裏手の方に取つた。昔は「俄雨でさへ御紋の下は、蛇の目の傘濡れはせぬ」と、それ程までに權勢のあつた加藤、細川氏の居城も、今は寂々然として、四邊には人聲も無く、所々の建物の跡らしい所には、草花々々生えるが、にうち捨てられてあり、唯老松鬱然として、名も無き小鳥の囀り、飛び交すのみ。何かしら因縁のありさうな「不開門」を通り、急坂を幾曲

折して、又平坦な道路に出で、次いで電車で水前寺公園に向ふ。

砂を填めて池の到る處から淡々と清水の湧く水前寺。寛永の昔、細川忠利公は此處に遊憩の亭を造り、成趣園と稱せられた。水底の色とり／＼の砂礫は皆火山灰、火山岩だと云ふ。水面には家鴨が浮んで居る。小さい方の池には數千の真鯉・鮎が銀鱗を閃かし、なだらかな土山が芝を被ふて美しい。池の周圍や築山の上には、大小様々の松が、或は高く虚空に躍り、或は低く地面に匍うて、互に呼應し、綠陰ににらへた茶席も、又風流人の眼を喜ばす。

斯くして悉なく一日の行程を終へ、ほつとした氣持で宿に引上げる。もう町には電燈の點つた頃だつた。今日一日の樂しかつた事を互に話しながら部屋に寛ぐ。間も無く夕飯だ。宿の主人以下、雜田の歡待がこの上も無くうれしい。主人は座の真中に立つて、色々此の地方の面白い方言、傳説等を話して呉れる。その度に一しきり洪笑爆笑が部屋を揺り動かす。

夕飯後の宿に於ける活動が、一層修學旅行の氣分を充分に味はして呉れる。故郷へ消息を知らず者、友と語る者、外出を誘ひ合ふ者、笑ふ者、歌ふ者、愉快な一ときが繰廣げられて、後は外出者が多くて宿は一寸静かになる。少し外へ出て見ると、流石は軍隊町で軍用犬が横行する。賑かな通り——花畑町あたりへ大分行つたらしい。明日は難關の阿蘇登山で、四時起床の事とて、學校宛の葉書を指出して、早く床に就く。

北村 忠夫  
西關 藤一  
山 川 繁

皆は昨日の疲れでぐすり寝てゐたせいか、先生の起床を告げられる聲を聞いて吃驚して、龜の子の様に頭を上げて、のこ／＼這ひ出した。今日の旅行は特に天氣が關係すると思つたので、直ぐ窓からのぞく。期待に反して今日は曇天だ。

午前五時三十二分熊本發、宿屋の人が見送りに來て呉れたことは、尙一層我等をして熊本に愛着を覺えさせた。

汽車は雄大な裾野の景色と脚下を奔る溪流とで、我等を喜ばせながら阿蘇に向ふ。坊中驛近くになると、もう五山の幾つかが其の英姿を現し始めた。車掌の親切な説明によつて、略々何山と理解出來た。午前七時十分坊中着、此處はもう舊噴火口の内部であると思ふと、阿蘇の大なることは唯々驚嘆の外はない。而も南北六里、東西四里、その中に十數箇村、五萬餘の人口を包容した偉大さだ。

一行は勇氣勃々、然るに幸か不幸か路上は傘や合羽が右往左往。空は一面灰色で晴れさうもない。荷物を茶屋に置くと、驛前に整列して待機のある乗合自動車に飛び込む。一同が乗り終ると直ぐ、阿蘇の五岳、高島、帽子、杵島、中、根子岳の中岳に向つて登山の途につく。座席に着いて先づバスの美観にうたれる。車窓は明るく展望に適し、且ゆつたりとした座席、觀光車としては満點と云ふ所。此ならお爺さんでも樂に登山が出来る。そんな事を考へてゐる中に、僕等の乗つたバスもやがて除るに驛の構内を迂り出すと、バスカールが歌を歌ふ如く、説明を始めた。その美聲を耳にしながら走る、觸目の走馬燈的風光と其の地理的、歴史的由緒とに就いて聞きつつ、見つつ、又考へさせられつつ、愉快に阿蘇山上へミドライブを續ける。

濃濃と立上る。その自然の威力に鬼氣を感じて、二三歩退いた。風雨の激しさは段々増大して行くので、如何にも爲し難く茶屋に引返す。小憩の後、又バスで下山の途につく。歸りは益々霧が深くなり。説明で想像するのみだった。

阿蘇は眞に説明者の

「此の偉大なる阿蘇は又、國立公園の一つにて、我が九州を横ざる、國際遊覽幹線の中樞なる位置を占め、西に雲仙、東に別府、中に火を噴く阿蘇の山、九州景勝地帯中、王者の如き感があります。」

と言つた如く、實に九州遊覽の中樞地たるのみならず、世界的活火山として、其の風光の雄大なる點に於て、他に匹敵すべき物はないであらう。兎に角一種變つた登山を愉快に終了して、一行は別府に向つた四時五十分別府着。

重たい荷物は宿屋にあづけ、遊覽バスで地獄廻りに出發した。ケロケロとした其の名前、考へただけでも何か冒險的感念が湧き起つて來る車掌の説明のうまさに僕等はより以上の愉快さを覺えて、窓外を恍惚として眺めてゐる。しばらくすると一行は二つに分れた。我等のバスは最初血の池地獄に向つた。見るからにぞつとさせる様な、眞赤な血が噴出してゐるのだ。此も火山の力だと考へる、その感じは、阿蘇を見學して來た直後なので、一層深刻に心に響いた。その次は鶴見、その次は坊主、海、等々次々に地獄を巡り歩いた。各々其の名前の示す如く、海地獄は眞青で海の如き感があり、坊主地獄は灰色の粘土の如きものが、ほこほこ怪しげな音を立てて、坊主の頭の如くもり上つては消えて、後から後から出て來る。鶴見は見れば、鬼の恐しい像が濛々たる湯氣の中に毅然と立つてゐる。我等は眞に此の世を離れて

曇つてゐる爲分明的でないのが残念だ。森林地帯を見たり登つて、やがて廣漠たる原野が展開される。彼方が霧に霞んでゐるのも又一風變つた趣だ。

阿蘇と言ふは眞先に峻険な山を心に描いてゐたが、今登る此の路の廣さ、實に坦々たる絶好の登山道であるのには、一驚を喫した。

暫く行く中に段々ガソリンの臭が鼻を衝くやうになり、機關部が激しく震動し始めた。大分急になつて來た。一、二、三と小さな小屋が建てられてゐるのが微かに見える。路傍には、青草が寒々風が吹かれて躍つてゐる。

「今日皆様の御登山を迎へて送る牛馬は、阿蘇牛と呼ばひ、阿蘇馬と言はれて、阿蘇の一帶に放牧され、その数は數萬頭と申します。……」と車掌の言ふ牛馬は、此の邊の草を食ふのであらう。如何にしても此の天氣が恨めしい。緑の原が消える、褐色の火山礫の山腹が横たはつてゐる。

車輪の廻轉を續けて、登山バスが七合目の地點を過ぎたと思つた頃急に方向を左に轉換して、勾配の緩い坦道に入つた。と同時に東の方に、中岳頂上噴火口附近の熔岩帯が眼前に展開した。車掌の説明によつて遙か彼方まで霧が晴れて見通せた如く感じた。「火口の周圍が一里、中の火口が又七つ」と聞くに我等は愉快な様な、恐しい様な、種々の想像を描きつつ、時は經てバスは走る。觀測所を左に見て暫くすると終點に着いた。此所から雨具の用意を整へ、激しい降雨の中を砂礫の峻険な徑を縫ひつつ、案内人の後に従ふ。風の激しさは、流石に海拔千三百米の高山を思はせる。かくして漸く火口の縁まで達するころが出來た。風は益々強く、風雨共に激しい。白煙が火口の内部から

地獄に落ちて、その物凄いやつてゐる如く感じた。かくして我等は、驚異の感に打たれ、鬼氣に襲はれて縮んだ心を、沿道の青々とした木々や、車掌の快い説明に癒しながら宿屋へ引返した。

食事を済した後、皆は直ぐに浴槽に飛び込んで、一日の疲勞を癒した。やがて消燈して、寢に就く。 中川 禮三

五月七日 第五日目

朝六時半、兒玉旅館を出發し、七時五分の列車に乗込んで、耶馬溪へ向つた。

此の日、空は澄み渡り、日は照り輝いて、實に絶好の遊覽日和。函宮灣の海岸線を走つてゐる此の日豊線は、間もなく國東半島に入つて若草燃える野、若葉薫る山、日を浴びた平和の境を走つて行く……かの宇佐八幡宮の鎮座まします宇佐を過ぎ中津に著く。

此所で輕便鐵道に乘換へ、愈々耶馬溪の幽邃境を尋ねんとするのである。

やがて潺湲たる山國川の澗流が、突如として右側に眺められる。洞門驛を通過して青の洞門を左に見つくと、山國川を横断して、それを左に見ながら進む。

山國川の清流は岩を噛み、飛沫は巖を撲つて益々奇景を展開する。馬溪の翠峰は交臂去來して、眞に應接に暇がなく、電車の速力の迅速なのが、恨めしくさへ感じられる。

忽ち羅漢寺驛を過ぎ、深耶馬溪驛で下車して、直ちに後に聳える秀峰、即ち、山陽投筆の名所の下へ駈けつける。

耶馬溪中、稀に見る男性的、直線的な絶壁は、鏡の如く澄む深淵に

映じてゐる。一行はしばし恍惚として見られる。再び電車で引返す。今度には幾分緩かに走つて呉れたので、十分に馬漢の美を探勝し得たけれども何となく物足りなく、平凡だ。山陽の「馬漢百里、妙義の如きものは幾十峰なるを知らず」と稱讚した絶勝を期待して来た僕は、聊か失望せざるを得なかつた。

車中での説明に依れば、總じて、此の耶馬漢は曲線的の美に於て優れて居り、兎角普通人には喜ばれぬさうである。成程車中からも、南畫に見る様な、峰巒や、碧嶺の左右に映帶する激湍や、田家を配した風景等が到る所に見出された。

羅漢寺驛にて下車して、羅漢寺に詣でた。豊前(豊前)の谷方に關で、心までが溶け込みさうな、長閑な霞の中の路をさばり、さび歩いて行く。山の中腹禪海堂を通り、秩父宮殿下の御遊覽の御時の御成道から登り始める。

勾配の急な坂を、大小無数の石が覆うてゐる非常な難所で、危い足下に注意しつゝ、漸く頂上に達する。

橋の形をした岩石の上から、下の池に落ちてゐる水が、先づ目に付く。此の寺は、山を纏つて、五百の羅漢が安置してあるのであるが、別に拜觀しようとする氣も起らない。何だか總べてが人工的に見えて嫌氣がさして来る。

陰鬱な境内で晝食を済して下山し、途中、山國川の河原に下りて紀念寫眞を撮り、青の洞門に行く。

昔ながらに保存せられてゐる、所謂洞門の壁道を見た時、そのかみの巨人瀧海の前影が、髣髴と浮んで来る様に思はれ、その一つ一つの刻み跡をじつと見つめてゐると、彼の堅忍不拔の精神が其處に現れて天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

と詠んだ彼の心持の様に、私は陶然とし、恍惚として、その月に見入つた。月のあはれは種々であらうが、船上の月程趣のあり、風情のあるものはないだらう。私達の船は、波静かで月光の反映してゐる、黒い毛氈の上を滑つて行つた。丁度船は月をしてガイドならしめてゐる様であつた。

不圖我にかへつて甲板を見るを、輪投げの最中であつた。私も加つて共に興じた。私は時間の経つのも忘れて、肌を稍寒い風を受けながら、彼方の椅子、此方のベンチに掛けて、菓子・果物を食した。

餘り寒いので船室に歸つた。その時は十一時頃であつた。未だ疲れてゐる者は一人もなく、私も寝ようと思つてもなかに眠れなかつたが何時しか眠つて、それから少しも記憶がない。

横田 繁勝  
松本 顯美

### 五月八日 第六日目

その翌日、楽しい船の旅の一夜を明かして、私は顔を洗つて直ちに甲板に走つた。其處には言ふに言はれぬ瀬戸内海の美が、その壯快さが私を待つてゐた。私を手摺に寄りかゝつて、その美しさに打たれてしまつた。朝霧の中に點綴する島、その間を往來する漁船の群、丁度其の時小學校時代の讀本の文章を思ひ浮べて、そのありのままの描

或る一種の深い暗示を受ける。

洞門に別を告げて、肉刺の出來た足を引きつづつて、洞門驛に辿り着いた。

午後二時驛を發して、一路中津に向ひ、三時過ぎ中津に下車する。約半時間の餘裕があるので、市中を見物に出掛ける。が、疲労も加つて一向面白くないので、すぐ引返す。

三時十四分別府に向ふ。すつかり疲れて、居眠りをしてゐる間に別府に著く。時に五時十分。大急ぎで旅館に預けた荷物を取つて、直ちに名残り惜しい氣持で、大阪商船の「くれなゐ」丸に乗込んでしまつた。

船中は澤山の人で一杯で、京都農林の學生と一緒であつた。六時少し過ぎた頃、出船の銅鑼がけた、ましく鳴り出した。突堤には多數の見送人、その人達と交す無数のテープ。船は徐々に離れた。テープはだん／＼船を慕つて延びて行く。丁度何處かへ洋行する様な氣分にもなつた。船はスピードを増して、別府港は夕霧の中にかすんで視界の外に出てしまつた。

船は輕いエンヂンの音を立て、ゐた。大分港に入港すると、すぐ一路高松へ向つた。私達は三等船室であつた。甲板に出る者、船室で本を見る者、旅行の話をしてゐる者、輕いスリッパの音も輕く、得意然として走り廻つてゐる者等、種々様々で、私達旅行の疲を癒すのに充分であつた。

船は何處を走つてゐるのかわからない。私は甲板へ出て見た。遙か東天が白く、地平線に玲瓏とした月が空を照してゐた。恰も夜明の様であつた。白さは愈々加つて、儼然とした満月となり、水に銀波金波に見て、柿本人麿の

「ほの／＼と明石の浦の朝霧に  
島かくれゆくふれなぞ思ふ」

と、詠じた心持を思ひ測つた。私達の船は午前六時五十分高松着、京農の生徒と別れて下船、井戸屋旅館に向つた。楽しい船の旅を惜しみながら……

午前七時四十九分高松發の汽車で、八時四十分頃琴平着。琴平参拜を行つた。あの巡禮で有名な琴平宮である。然し私が参拜したその時、此程有名な宮であると思ふことは出来なかつた。普通の御宮と少しの變りもない。参拜者もあまり多くもなかつた。然しその琴平参拜道路の石段の兩側に、全國から集つた金額を書いた石の立札が、隙間もなく堵列してゐるのには少なからず驚いた。琴平宮参拜後、社殿の前で記念撮影の様なものを行ひ、社殿を見學した。繪馬堂にある澤山の繪を書いた大きな額に感心した。それから電車で尾島、栗林公園に向つた。五十分余り單調な参拜の間を掃られて、公園前で下車した。

園は舊藩主松平家の別荘であつた所で、大正十一年天然記念保存物となつてゐる。紫雲山を背景とし、南北兩庭から成り、六池十三丘を巧に配合し、總面積十六萬五千餘坪、園内には動物園、運動場、商品陳列館、花壇等があり、水に泳ぐ真鯉、水に映る松の青葉、それらの規模、結構は高松市を代表する物である。大蘇鐵群を背景とし、池を前景として一回記念寫眞を撮つた。

公園前からはたゞの電車に乗つて、未だ見の岩岩臺地屋島へ向



つた。屋島と云へば島の如く考へられるが、只一筋の川によつて隔てられてゐる。菟田が所々に在り、秩序整然たる状は立派であつた。

徒歩で登山する者はカタモト停留所で降り、ケーブルで登る者は屋島登山口で下車した。大多數の者は徒歩登山だ。小石のごろつく梢々急傾斜な道を汗を拭き、三々五々上衣を肩に、白い着物の四國遍路と共に登る。中腹を越えた頃に有名な疊石が有つた。話に聞いただけで、初めて見る疊石に一同注目して見る。色々の學校名、氏名等がサインしてある。先着のケーブル連上頂上で落ちひ、屋島寺に参拜した。

屋島寺は西國八十四番の札所で、千手觀世音菩薩が祀つてあり、源兵に關する遺物が多く保存され、有名な雪の庭がある。談古嶺へ向ふ左手に、源氏の土が血潮を洗つた云はれる血の池がある。

談古嶺から瀬戸の海を眺めると、小豆島、大島は眠るが如く霞んで横たはり、眼前に五剣山が聳え立ち、香川壇の浦が眼下に展開してゐて思はず當時追懐の念に打たれた。説明を聞けば屋島、五剣山は同じ時代に出来たものださうである。一方は其の名の示す如く峻しく屹立し、他方は屋根の如く平坦に横たはり、五剣山の麓には血氣に逸る源氏の若武者が陣取り、屋島の麓には平家の公達が陣取つたのも面白き對照である。眼下右手に御不運であらせられた幼帝安徳天皇が、一年半住びせさせ給つた黒木の御所の跡に、帝を御祀りする安徳天皇社が鎮座しますが、此の所が平家の本陣であつたのださうだ。義經の弓流しの古跡は、弓流し橋として、義經の智勇を今も尙稱へてゐる。扇の的を見事射て、弓矢のほまれを轟かした那須の與市の駒立岩、祈りの岩があり、大將義經の身代りとなり、壯烈な最後を遂げた日本武士

悲しい様は氣持さへ起つて来る。單調な野山の風景に疲れて、屋島神社参拜、熊本見物、大阿蘇登山、別府見物等が、過ぎ去つた懐しい追憶となつて、走馬燈の様に次々頭を浮んでくる。

大規模の三石煉瓦製造所、赤穂の鹽田も一瞬にして過ぎ去り、須磨の海岸の自然美に打たれつゝ、零時四十三分神戸着。直ぐ隊伍を整へて湊川神社へ赴く。此まで九州の田舎都市ばかり歩いて来た我々に、日本第一の貿易港神戸市は、何んだか新しい刺戟を與へて呉れる様だ。素晴らしい流線型タクシーは快走してゐる。壮麗な神社に参拜す。赤坂の城に立籠つて屢々奇兵を用ひた事、城の途に支へられぬを悟つて火を城に放つて千早城に據り、天下の兵を一孤城に引き受けて大義を唱へた忠臣楠正成公の靈前に、唯感慨無量の心地で額突いた。約一時間ばかりの自由解散の後、神戸驛前に集合した。その間三越その他の大きな店に入つて土産物を買ひ求める。午後二時三十九分、神戸發で彦根驛に向ふ。此から日本の心臓、阪神工業地帯が展開された。煙突は實に林立の壯觀を呈し、噴煙空に立ちこめて、凄じい日本工業地帯の面影の躍如たるものがある。力強き歳一萬一の時を思つてその感を深うした。大阪も過ぎ、四時十六分京都驛で乗換へる。連續的睡眠不足の爲、車中席を得た者は晝寝をしてゐる。間もなく汽車は逢坂山東山の隧道も通り抜けて、漸く近江路に入つた。彦根に近付くに連れて、過ぎし旅行の追憶が、深く脳裡に涌いて来るのだつた。左窓より懐しい琵琶湖も見える。安土、稻枝を過ぎるに連れて、級友は三々五々減つて行く。嗚呼！懐しい彦根城は荒廃して、我々を迎へて呉れる。嗚呼懐しい城。汽車は午後五時五十二分滑る様にブラットホームに入つた。一週間の長い、楽しい旅行の終つた驛には、校長先生を

土の花、佐藤繼信の墓があり、思ひは壽永の昔に還り、雄々しく駒を進めた鎧武者の面影を偲びつゝ、源平餅を片手に名残を惜しんで談古嶺を去つた。

北嶺の先端遊仙亭の名は、皇后陛下が未だ姫宮様でおはせし頃、行啓あそばされた御砌、御命名あそばされたものださうだ。

獅子の靈岩から瀬戸内海を見れば、右手にお伽話に名高い桃太郎の鬼ヶ島、昔海賊の住處であつた洞窟が存在してゐるさうだ。

下山の途に着き、再び電車に揺られて、その夜は井戸屋旅館で旅装を解いた。

### 五月九日 第七日目

六時起床。旅装を整へて、七時井戸屋旅館を出發した。午前七時五〇分、鋭い汽笛一聲、「四國よさらば。」と連絡船白島丸は、除るに高松埠頭を離れて、宇野港へ向つた。十分間の、少時間の船路を託す白島丸は、あまりに小さかつた。爽快な氣分で甲板へ出た。級友達は三々五々手摺に靠れて楽しさうに雑談に耽つてゐる。海面には、未だ朝霧が晴れてゐない。非常な期待を以て迎へた國立公園瀬戸内海の朝景色は、霧に包まれた、點々散在する小島が、濃墨色の姿を海に浮べてゐるのみだ。朝早くから漁舟があらゝちに、三三五五集つて大自然の美しい中で、悠然として働いてゐる。突然「真島だ！」と言ふ聲が起つた。見れば島全體に木は疏らに生えて、盛んに黒煙を吐いてゐる。製錬所がある。間もなく船は宇野に入港した。直ちに汽車で岡山に向ふ。兒島半島の着々開拓された所は、奇奇とした夢畑になつてゐる。岡山着。吉備團子を買ひ、京都市列車に乗換へた。唯もう残されたプランは、湊川神社参拜だけだと思ふと、眞感胸に迫つて、何んだか

初めとして、多數の先生が笑顔で迎へて下さつた。

一同驛前に集合。原田先生の發唱で、一同「彦根中學校第四學年旅行隊萬歳」を三唱した。

入學以來、待ち惚けてゐた修學旅行も一大團圓を告げて、總べては一瞬で過去の追憶となつて了つた。一同連續的睡眠不足を感じつゝ、土産物土産話を一杯持つて、懐しい家路へ急いだ。

清水 一雄





特 輯

上級學校だより

姫 高 よ り

一〇卒 居 長 賢 藏

私は中學卒業後直に進路を高等學校にとりました。姫高へ入學してもう一ヶ  
年半、記念祭で騒いだりしてゐる中に何の把むところもなく経つてしまひまし  
た。

さて諸君の最大の關心は自分といふことです。従つて現在の社會制度がさうあ  
らうと社會情勢がさうあらうと、殊に高等學校の入學試験がさうであらうと、  
失禮ながら諸君はさうすることも出来ないのだから、愚痴をやめ、總てを忘れ  
突進的に受験勉強に打ち込むことです。

私が姫路へ来て都會地の中學生が如何に猛烈に勉強するか、事々に驚く許り  
です。田舎の中學生が都會の中學生より將來伸びる力が豊富であるなご、は、  
全く結果的な見方で、如何に優秀な才能を有つてゐても入試に失敗しては話に  
ならぬではありませんか。諸君はとも角もスタートに於て勝たねばなりません  
人生のスタートに於て傳統百何十年の彥中精神で勝つこととせう。  
勉強法として、受験雑誌や添削社との交渉を全部と考へるのはさうかと思ふ

寸 語 録

卒業するに當りて

○ 参考書を漁るな。人の動きにたよるな。  
勉強は自力でやれ。

橋 慶 夫

○ 眞面目、勤勉、快活。

佐 藤 匡 男

○ 落膽や、やけくその谷から登るには倍の努力  
を要する。一瞬時もまじめの心を。余は遊び  
すぎたり。

上 田 安 次

○ 健康、勉強、彥中精神の發揮を望む。  
あ、懐しき金龜城よ。

徳 岡 克 己

○ 明朗なれ。

和 田 一 之

○ 素直に 精確に 眞剣に

樋 口 正 三

○ たゞ意志を鞏固にせよ 體験上強調する。

島 本 光 尙

○ 校友會のために尊く、熱き、赤き、汗と涙と  
血を流してくれ。

川 村 徳 治

○ 心配の種を蒔くな。  
参考書を多く漁るな。

大 辻 吉 造

○ 在學五ヶ年は長いやうで短い。短い學園生活  
を眞面目で暮せ。ピージャスト エンドフイ  
ヤナット。

湯 本 信 良

○ 平凡でよい。平凡に徹せよ。日常をシツカイ  
やれ。

石 田 康 祐

尤も準備が深くなるほご、それらのものと關係が深くなるのであるが、それら  
のものは利用すべきもので決して利用さるべきものではありません。試験の必  
勝法は大膽にあるとよく言はれるが、準備不十分の人が、いよく試験場に臨  
んで目を閉じて見たつて大膽になれるものはありません。整頓ある答案は整  
頓せる頭腦から生れるのです。學問に王道なし、諸先生と呼吸を合し歩調を合  
して懸命に努力して準備につまめて下さい。但し試験準備が中學生生活の全部で  
はないのですから、運動可なり旅行可なり若さの感激を謳つて下さい。  
次に餘裕のある人は讀物に注意してキングや日の出等の類より漱石や藤村や  
鷗外のよい作品や芭蕉や子規の俳句、啄木の短歌などに親しむ方向を求めて下  
さい。中學時代に名作家のよい作品を一通り讀んで置くことは後日のため何か  
と得る處が多いものです。  
では健康に御奮闘下さい。

廣 島 高 師 から

一〇卒 井 上 顯 敏

在學中のボート部を思ひ出す。出艇、乗艇、港灣の力漕、鐘紡沖の死力強引  
松原の水泳、磯の上陸、多景島長濱への遠漕、三年の時は大津まで四年の時は  
今津まで遠漕した。も一度そのメンバーであつた場所を漕いで見たい。

銀杏の散りゆく校庭、白雪亂舞の控室の窓、金色に燃える玄宮園の芝生、櫻  
の公會堂裏、お城の樹間、旅行、演習、行軍等たゞなつかしいノバかり。  
廣島は質素な街です。學生には好適です。市内には樹木多く、夏の新緑がよ

い。郊外や市の内外の小丘等散歩によいとが多い。  
上流に太田川があり、七つに支れて市内を流れてゐる。潮の干満が川口から一里位上流に影響する。ホート漕ぐのも興味である。

學校は文理大、高師、附中、附小と四校の混成で、且諧和統一して一寸愉快一寸珍らしい。

寮生活は一年を主とするが、日課規律で、五寮が部對抗で何かと試合をしたり、親睦したりするのも面白い。學科は科目が少く、授業時間も少く、火曜日や二時で他の日は大抵五時間、實驗や手工作りや熱が出て張りきつてゐます。私の専門科目は物理と化學。

生徒氣質は固くなくむしろ、和やかにそして朗らかな雰圍氣です。皆親切で運動も盛んで試合や大會の行事も盛澤山にある。音樂會、展覽會、講演會、映畫會等も度々催される。

滋賀縣人會の會員は十五名、内先生方が四名、學生課の方が二人、大學生三人、高師生七名、内彦中出身三名、親睦の會合もやつてゐます。

### 入學試験の事

「この試験の程度は高くない」とは誰もいはれる事です。實際、大ていの問題が中學の三年四年程度で、五年までの正課だけでもしつかりやつておけば大丈夫なものです。中學の教科書を徹底的にマスターする事、が準備としては必要で、又それだけやれば大てい大丈夫です。それには、毎日の授業が大切だと思ひます。豫習、復習、殊に授業時間中の緊張は最も効果的だと信じます。本校だけではありません。中學校の正課だけを完全に自分のものにしたら、大て

いの入試難關は突破出来ると私は思つてゐます。只、本校は専門科だけは問題の程度が高いので、参考書一冊をマスターする必要があると思ふのですが——  
この試験は二回になつて居ります。第一回が筆記試験です、試験時間は専門科目以外は充分あります。同じ時間内にその學科入學志望者には特題だけ多く課せられるので、他の者は時間が多くあるわけです。この試験の對策としては前述しました教科書の徹底的理解と、専門科目の研究とです。第二回は、第一回試験の結果より採用人員の二倍をとり、口答試験と身体検査が行はれます。口答試験は、第一次が専門科目の學術試験と、家庭の事情、思想的の事等です。學術試験は先づ何かについて尋ねられ、答へるとすぐその實行をさせられます。國漢科等は「××といふ本は讀んだ事があるか」ときかれ、あるといへばすぐその本をとりだして「讀め」とやられるさうです。物化等は化學の反應等をきかれ答へると、實物を出され實驗を演ぜられます。しかもそれは四分とか五分とかの短時間にやらされます。この場合、正確な、自信ある知識が要ります。第二次口答試験は校長の口答試験です。左右にずらつと八九名の先生が並んで、一舉一動に採點して居られます。前の家庭の事情等を聞かれる所や、思想的の試験の所、及びこの校長の試問は、態度、言語が重く見られます。先日ある先生が「試験を二回した理由は云へませんが、會つてみないと人間が分かりません口答試験でたすかつた人もありますから。」といつて居られました。  
在學生徒諸君が振つて受験されん事をのぞみます。

起てノ 笑へノ そして努力を續けよ。  
たゞ努力することにによりて自覺は高まる。

○ 淺野 惠 誠

健康、至誠奉公を服膺せよ。勉強も誠を以てやれ。

○ 馬場 國 夫

確實に、大望を抱いて現實に愈るな。

○ 漢 正 印

目を高所、大所に注ぐこと。

○ 北 川 勵

明朗快活、短時間を利用せよ。

○ 松浦 晴 比 古

眞實の自己を知ることに、而して自己としての最善をつくせ。

○ 都 築 二 郎

磨け赤鬼魂。輝かせ彦中。

○ 宮 川 清

スポーツ、無邪氣。

○ 南 向 誠 諦

元氣と敏度と頑張り。

○ 湯 本 壽 夫

悔は苦痛、その日その日の教材を十分かみくだく努力を思ふ。

○ 菅 原 道 忠

黙々勵精、議論不要。

○ 宮 西 正 一

師を信じ、師に感謝して、日々の受業時を最大に活用せよ。

○ 藤 井 佐 一 郎

庭球部へ入るすべし、人間が明朗になる。

○ 馬 場 晃

大膽に細心に、わからぬ處はわかること。までの熱意あれ。

○ 小 林 研 一

金澤より

一〇卒 西島輝夫

兼六公園の楓も今や酣と紅葉して、眼も醒める斗り美しい姿を霞ヶ池に寫して居ります今日此頃、城山も美しく彩られ、懐しい母校の校庭のあの、私達を五ヶ年の間日々静かに暖い胸に抱擁し、無言の中に多大の暗示をあたへ、やさしく育て上げてくれた大銀杏も美しく紅葉してゐることせう。

母校を卒業しましてから一年半、何時もく御無沙汰のみして居りまして誠に申譯も御座いません。休みなぎ歸りまして直接に間接に母校の愈々發展して行く姿を見、蔭ながら何時もく喜んで居る次第で御座います。

來年は母校と同じく、四高も創立五拾周年です。創立五拾周年を期して更に一大飛躍をなすことせう。

今日は晴天で、全校生徒の野外演習がありました。汽車で小松迄行き、辨慶の勸進帳で名高い安宅附近で演習し、演習終つて關所跡で豚汁、果物を喰べて晴れた秋の一日を大變愉快に過しました。

現在四高には彦中より三年の理乙の小林さんと私の二人しか居ないのでとても寂しいのです。金澤高工には三年の機械科に北川さん、土木科に佐藤さんの御二人で、金澤學生彦中卒業生は合計吾々四名ですが、とても親密に交つて居ります。

小林さんは馬術部で大いに活躍しておられます。私は柔道部の末席を穢しております。四高の柔道師範の坂井先生は私が中學三年のとき、夏休みの練習に當時まだ武專の學生で吾々のコーチャーとして御指導下された方で御座います

又八月迄四高の配屬將校で居られ、現在東京帝大へ行かれた小川中佐は、もと虎姫中學の教官をしておられた方で、同じ長濱の同じ區内に住んでゐたことのある方で御座いました。

又、五年の方は御存知で御座いませうが、もと母校の教官でおられた狩野先生は、今金澤の司令部においてになり町でも時々お會ひし、御宅も學校より近く、以前御宅へ参り、色々と歓迎していただき、其の上、中學のときと同じ様に色々と各方面につき御忠告下され、何時もにかわらぬ先生の御心に大いに感謝いたしました次第です。金澤に於ける吾々のグループをもつて、賑かにするために、さし／＼本校なり、高工へ御出で下さい。もし行かうと思つてをられる方で何か不審なこともありましたらさうぞ御遠慮なく御尋ね下さい。私の知れる限り御答へする積りで居りますから。

四拾幾星霜傳はつてきた寮にまつわる怪談や、校庭の三本松の傳説なご色々ありますが、それは又の機會に譲ることとして本日はこれにて筆を擱きます。最後に、諸先生方や校友會諸兄の御隆昌と母校の發展を心から御祈り申し上げます。

諸君に一言

一一卒 島津亮二

昨年の今頃を想ひ、現に一所懸命に勉強される諸君を想ひ浮べまして母校の諸君に送ります。三高へ入る爲なら死んでもよいと思ひながら頑張つた事もありませんでしたが今考へますれば余りにも悲壯(?)ではないでせうか。私自身はか

如何にすれば健康を得るかをまづ考へよ。勉學はその上で、人生は長い。

宮崎俊夫

腹を造れ、ゆつくり急げ。

石橋忠彦

中學時代に於ける努力の不足は全人生の悔。

山田初藏

二年三年時代の徹底的勉強は四年五年の底力となる。

門野美喜藏

四五年になつてから二年三年の分をやり直したるのも一つの方法だ。

田澤清一

日々の日記を書くことを勤む。自覺と感謝と

柴田良治

將來の理想に埋没せな、現實をたゞ前進せよ

上田源六

たゞ奮闘、たゞ和寛。協同性。

私は成功への一路を唯進む。卒業に當りては諸先生に對する感謝あるのみだ。さらば。

池田克利

校規嚴守は徳性涵養の法なり。

中西末次郎

あの學科の點が悪かつたからもう駄目だなど思はずに、その學科をより以上努力せよ。

村西源一郎

正直にくらせ、校友會を強力にせよ。

松宮久延

進んで困苦に當れ、体験は尊いぞ。

尾本市郎

Boys be ambitious! そしてコッソリ勉強。

越武和

上級生にはまゝ教室ではあまり勉強せない者がある?。教室主、自宅徒たれ。

庄司傳三